

貴婦人に理不尽 鬼の憲兵隊 ソドムの飽食

終焉の始まり

昭和二十年八月十三日午後 その日の東京の空は、朝から晴れ上がり気温はぐんぐんと上昇していた。

高く登った太陽は、巡視中の若い憲兵少尉大島の上に容赦無く強烈な陽光を降り注いでいた。

辺り一面は、連日のB-29の猛烈な空爆により焼け野が原と化しており、日差しを遮る樹木も^{ことごと}尽く喪失し、そのため地面からの照り返しも強く、余計に暑さが身にしみるのだった。

ジリジリと肌を刺すような猛烈な暑さの中で汗を滲ませながら、トボトボとした足つきで坂を上り、丘を一つ越えると辺りの景色は一変した。

東京の中でもこの一画は、何故かこれまで空襲に曝されることなく、戦争前の景色をそのまま留めていた。

辺りには多くの緑が残って街路の陽光を遮り、木々を渡る涼やかな風に吹かれて、少しほっとしたような気分になった。

この一画は、^{いおゆる}所謂お屋敷街で、豪華な門を構え、瓦を載せた高い塀で囲まれた豪壮な屋敷が軒を連ねていた。

「アメリカさんも庶民には遠慮無く焼夷弾の雨を降らせるが、金持ちや、お大尽には遠慮するのか？」

勿論偶然ではあったらうけど、この光景の違いに思わず戦争の不平等性のような物を感じるのであった。

居並ぶ豪邸の多くは日本風の屋敷であり、塀が高く中の様子を通りから窺うことは出来なかったが、その中に一軒だけ白亜の洋風の館があった。

通りに面して鋳物作りの大きな二枚扉の門があり、両側の塀はギリシャ神殿の柱を模したような石柱の上に石板を渡したアーチ構造となっていたので、塀の円柱の間や鋳物の門の格子の間から中の様子を見ることが出来た。

門と建物との間は前庭になっており、門から玄関に向かって石畳の道が出来ていた。

石畳の道の両側は芝生の庭になっており、幾つかの大きな彫刻が両側に立てられていた。

建物は石造りの3階建ての大きな洋館で、玄関には車寄せがあり、車を玄関まで横付け出来るようになっていた。

建物の裏は西洋風の庭園になっているようだが、通りから窺うことは出来なかった。

大島は自分が生まれ育った、庭も無い、門も無い、玄関が細い路地に直接接する下町の粗末な家を思い出しながら、しばし、この豪壮な館に見とれていた。

その時大島の背後を黒塗りの大型セダンが通り過ぎると門の前で停車した。

車から降りて来た正装した初老の男が、片側3メートル近い鋳物造りの大きな扉を開いて、そのまま車を敷地内に進めた。

どうやらこの館の主人が帰ってきたようだ和大島は思った。

さて、どんな人間がこのような大きな屋敷を所有しているのか興味をそそられ、通りから様子を窺い続けた。

車寄せに大型セダンを停止させると、先ほどの初老の男が車から降り立ち、恭しく後部ドアを開いた。

最初に車を降りてきたのは和服姿の婦人であったが、その姿を見て大島は息が詰まった。

「美しい！まだ日本にこのような美しい人がいたのか！」

最近では戦争の激化に伴い、女性の服装もモンペ姿となり、髪にパーマをかけることも禁止され、化粧も出来ない世の中になっており、街でも美しい女性を見ることが無くなった。

ところが、そのような世の風潮に全く影響されることなく、まるで戦前の華やかなりし頃に大量に作られた映画の主演女優のように豪華で華のある女性を見て、大きく心が揺さぶられた。

夏の暑い日差しの中でも、白地に薄くすみれ色を染めた夏用の訪問着を優雅に着こなし、着物の襟足とアップに結い上げた髪の間から見える細くて白いうなじに目が釘付けとなった。

続いて車から降りて来たのは、さっきの婦人の娘であろうか。歳の頃はまだ 20 才には達していないように見える。

戦前に流行したモダンガールとよばれるスタイルに似た、頭に帽子を被り、帽子と同色の薄い若草色のツーピースという洋装姿であった。髪は短く肩までで切りそろえ、母親に似た端整な白い顔に、大島の目は奪われた。

少女からお淑やかなレディーに変化する年頃の娘の持つ初々しさが全身から溢れ出ているようであった。

最後に降りて来たのは、妹のようであった。

女学校の制服を着て、長い髪を頭の両横で三つ編みにした、まだあどけなさが残る少女であった

が、母や姉譲りのぱっちりした目鼻立ちをしていた。

何やら楽しそうに前を行く二人に話しかける姿が大島に妙に愛くるしく映った。

憲兵隊本部の地下の尋問室で、小島憲兵准尉が容疑者の取り調べに当たっていた。

本来なら尋問室の扉を尋問中は閉じておく規則であったが、熱い夏の日ゆえ、部屋の中の熱気を少しでも下げるため、扉を全開にしたまま女性容疑者を竹刀で打ち据えているので、竹刀が女の柔肉に食い込む音と女の悲鳴が廊下にまで響き渡っていた。

廊下を行き交う憲兵達の中には、この女性の悲鳴に興味をそそられ、立ち止まって、開け放たれたドアから中を覗いていく者もいるが、多くは何時ものことと、関心無さげに通り過ぎて行く。

女は小学校の教師をしていた。

やはり教師の夫が社会主義活動に身を投じていたため、官憲から追われる身となっていた。

憲兵の追跡を受ける夫の逃亡を手伝い、首尾良く夫は逃走に成功したが、自分は逆に憲兵隊に捕らえられてしまったのだった。

女は夫と違い社会主義思想には全く興味は無く、反政府活動には一切関わっていなかった。

ただ愛する夫を残酷な憲兵の手から助けたい一心での行動であったが、巻き添えを食った形で捕らえられてしまったのだった。

歳は24歳になったばかりであった。

色白で全体にぱっちりした体に薄汚れた囚衣一枚着せられただけで、両手首を頭上で一つに括られ天井から吊り下げられていた。

床につま先が着くかどうかの高さに吊られているため、竹刀で打ち据えられて体が揺れ動く度に、体重が両手首を絞め上げ苦痛に喘いだ。

先刻から既に一時間近く、小島の竹刀の打撃を浴び続けており、苦痛と打撃で熱を発した体は全身水を浴びせられたように汗で濡れ光っていた。

天井に向けて両腕が高く持ち上げられていたので囚衣の筒袖は両肩まで下がり、捲れ上がった袖の隙間からこんもりとした黒い脇毛が見え隠れしていた。

小島の目には汗に光る脇の下の豊かに盛り上がった汗を浮かべた毛が、何か女性の下の方の飾り毛を想起させて、劣情を催すのだった。

制服の上着を脱ぎ捨てて上半身ランニングシャツ一枚で、骨張った体に汗を浮かべる小島が、これまで散々女性を打ち据えた竹刀を壁に立てかけた。

そして、そのまま女の傍に歩み寄ると、女の顎に手を掛けて自分の方に引き寄せ、苦痛と怯えた

表情を浮かべる女の顔を見据えながら言った。

「お前は、全く頑固な女だな！早く旦那の隠れ場所と活動家組織の情報を吐けば、直ぐに家に帰してやると言っておるのに。」

「信じて下さい！主人は私には黙って、活動していたので、本当に私は何も知らないのです！」
竹刀で打ち据えられた熱を持ったジンジンする痛みと汗が流れ落ちる度に傷口に滲みる激痛に顔を歪ませながら女が悲痛な声音で応えた。

「お前は本当に強情な女だ。どうやらお前のような強情な女には、体をいくら叩いても効き目が無いらしい・・・」

厭らしく口を歪めると、哀れな女を妖しい輝きを秘めた目でじつくりと眺め回した。

女はその不気味な小島の表情に今まで感じた事の無い不吉なものを感じてブルッと身体を震わせた。

小島は開け放たれたままの廊下に面した扉の方にゆっくりと歩み寄ると、扉を閉めてガチャリと内側から鍵を掛けた。

そして、うっすらと笑みを浮かべて女の方に戻ると、女を吊り上げていたロープを下げて、一旦女を床に下ろした。

長い間拷問を受け続け、抗う気力も体力も喪失した女は、両手を垂れ下がるロープで目の前に吊り上げられたまま、力なく床に尻餅をついていた。

女の様子から抵抗する気力も無い事を確認すると、両腕の手首を縛り上げていた縄を解き放ち両腕を自由にさせると、ぐったりと項垂れる女のじつとりと油汗に濡れた囚衣の襟に手を掛けて、有無を言わず無理矢理に着衣を引き下ろした。

突然の行為に女は引き攣った声を上げて体をビクッと硬直させた。

女のか細い抵抗も無視して力尽くでズリ下ろした囚衣の下から乳房が露出した瞬間、女が鋭く悲鳴を上げた。

囚衣の下には何も身に着けておらず、女盛りの豊かな乳房が野卑な憲兵の目の前にさらけ出された恥ずかしさに、思わず身体を屈めて両手で露わになった乳房を覆い隠した。

小島はそんな女の羞恥に構うことなく、ニヤニヤと口元に嫌らしい笑いを浮かべると楽しそうに鼻歌を鳴らして、まだ痺れが残る力の入らない女の手首を掴んで無理やり両手を乳房から引き剥がして、再び元のように手首を揃えて縛り上げ、天井の滑車から垂れ下がるロープに結び付けた。

そのまま滑車に取り付けられたもう一方のロープの端を掴むと、力一杯引き絞り上げた。

尻餅をついていた女の身体が上に向かって持ち上げられ始め、見る見る天井に向かって吊り上

げられて行った。

両手首に体重を受ける苦痛に、身体を振って悲鳴を上げたが、そんなことに躊躇することなく、元のように爪先が床に届くか届かないかまで吊り上げると、ロープを固定した。

目の前にはたわわな乳房を顫わにして、薄汚れた薄い腰巻き一つで宙に吊られる女がいた。

全身にたっぷりと脂肪を置いた肉付きの良い女だと、囚衣の上から見ていたが、こうして実際に着衣を剥ぎ取って観察すると、その白くて柔らかな裸体が良く判った。

恐怖と緊張で大きく上下する前に向かって垂れた大きな乳房は、抱き重りするようなボリュームがあった。

そのふくよかな乳房の先端から、ちょこっと恥ずかしそうに飛び出す桜色した可憐な乳首から、この女は結婚してからまだ余り性交渉を経験していない事だろうと思った。

少なくとも小島の嗜好する様な激しい性交など知るよしも無いだろうと、まだ初々しい乳首を見詰める内に、生唾が込み上げて来て、残忍な憲兵の喉がなった。

その白く柔らかな乳房の上には痛々しい赤黒い痣が幾つも残されていた。

粘っこい眼付きで女の全身を舐め回すように見つめながら、自分が柔肌に刻み付けて腫れ上がった傷跡を見て回り、その衝撃の大きさを確かめる様に傷口を指でなぞっては女に悲鳴を上げさせた。

女は小島の全身から発する淫虐な雰囲気^{きめ}に気おされ、これまでに感じたことの無い種類の恐怖感に苛まれガタガタと体を震わせていた。

女の体に顔を近づけて、たっぷりと脂肪を載せた肌理細かい柔らかな女体^{きめ}を子細に見つめる間に、全身にびっしりと浮かべた汗の臭いの中に甘酸っぱい女体の発する匂いを嗅ぎ分けると、小島の劣情にメラメラと陰湿な火が燃え広がった。

小島は無言のまま女性の下半身を覆い隠している薄い布に手を伸ばした。

腰卷きを止めている紐に指をかけ、その最後の盾を今にも奪い取ろうとする男の動作に、いやいやと涙を浮かべ、クネクネと腰を小さく震わせて哀願しながらも、両手を高く上にされた宙吊り姿勢のため女は抵抗出来ずにいた。

この卑猥な憲兵の意図を察しながらも抵抗を封じられて、恨めしそうに小島の動作を睨み付ける女の顔を口元に卑猥な笑みを浮かべ、劣情を帯びた目で見上げながら、女を焦らすようにわざとゆっくりと紐を解き終えると、有無を言わず女^{きめ}の体から唯一残っていた最後の布切れをさっと奪い取った。

その瞬間女は小さく羞恥の悲鳴を上げて体を振った。

両手に女の腰巻きを掴んだままの小島の目の前に一切の衣類を奪われた若い女の柔らかな肌が
あった。

野卑な男の目の前に覆い隠す物も無く白い裸身を晒す羞恥に身悶える哀れな女を冷たい目でジ
ッと見詰めた。

両乳房にも、腹にも、背中にも、尻肉にも赤く竹刀で打ち据えた跡がついているが、前から見た太
股の間と下腹には傷跡は無く、ぽってりとした柔らかな下腹とムチムチした肉付きの良い生白い大
腿の形作る三角形の谷間には隠しようも無く、こんもりとした飾り毛が見えていた。

恐怖と羞恥でふるふると震える黒い繁みを見つめながら、まだ手付かずの責め所が残されていた
ことに小島は秘かに喜びを覚えた。

無造作に女の秘部に右手を伸ばすと、指先で下から上に向かって、縮れた毛をソロリと撫で上げ
た。

いきなり女の大切な部分を被い隠している守り毛を逆撫でされた気持ちの悪い感触に女の喉がヒ
エツと鳴った。

そんな女の反応を楽しむように、節くれ立った右手の掌を、繁みの上に押し当てたまま、媚肉の間
に指を這わせ始めた。

そして、女の表情を窺いながら、空いている左手で豊かに垂れ下がった乳房を揉み始めた。

「どうだ、素直に吐く気になったか？」

右手の指で、もそもそと股間を這わせながら、女の耳元で囁くように聞いた。

「厭らしい人、あなたの目的は最初から尋問では無く、無抵抗な女を弄ぶことだったんでしょう？」

女に凶星を付かれて、少し照れたような不敵な笑みを浮かべると、

「この口が生意気なことを言うじゃないか？上の口は生意気だが、下の口は正直だぜ・・・口では
生意気なことを言いながらも体が亭主を裏切っているのはどこの何奴だ？」

「ああー、嫌！言わないで・・・」

不意に女の声に妖艶なものが混じった。

結婚してから幾度かの夜を夫と共に過ごし、漸く女の喜びを知り始めた体が、異常な状況下にも
関わらず、いや、自分の愛する夫以外の男の目に逆らう事も出来ず羞恥の姿を晒し、大切に守っ
て来た女の最も大切な部分を残酷な憲兵から指でまさぐられるという、異常な状況に神経が過敏
となり混乱しているゆえか、鋭敏になった神経を巧妙な指技により刺激され、自分の意志に反して
反応して行くのが恨めしかった。

小島はこれまでの経験から激しい拷問に晒された女が、僅かな刺激で股間を濡らしてしまうことを知っていた。

恐らく、絶え間なく殴打され腫れ上がった全身から込み上げる激越な痛みが熱を持って女体を火照らせ、恐怖と苦痛で早鐘の様に撃つ心臓の鼓動が、まるで男と女の睦み事の最中の様子に似て女体に影響を及ぼすためだろうと思った。

そんな自らの身体の反射状態も知らずに、憎い憲兵の手技により反応してしまった事に、この女は羞恥に全身を赤らめていた。

「ああ・・・いや・・・止めて・・・」

女の拒絶の声が媚びを含んだ様に小島には聞こえた。

腰を振らせて小島の魔手から逃れようと儚い抵抗を続けるのを無視して、指先による秘園の探索を十分に満足した後、右手の中指を秘裂の最奥のジツリと湿った肉の洞窟にスルリと滑り込ませた。

その瞬間、ヒッ！とくぐもった悲鳴を上げて宙吊りにされた体を硬直させた。

羞恥と恐怖の故か、小島の指をグイッと締め上げる柔肉の感触と、周囲を覆う繊細な襞の心地良い感触を楽しみながら小島はなおも指先で内側を撫で回した。

この若い女の柔らかな華洞の中にコイツの夫は、何度いきり立ったモノを押し込み、激しく抜き差しを繰り返し、桃源郷を彷徨った挙げ句、生臭いザーメンをこの中にぶちまけたのかと想像すると、まだ見たことも無い夫に嫉妬の様な物を感じるのであった。

どっぷりと蜜壺の中に指を浸した後、股間を襲っていた右手をゆっくりと引き抜くと、ネツリとした体液に濡れた指を女の目に見せ付けた。

「これは何だと言うのだ？・・・フフ・・・汗だとでも言うのか？」

自分の指技の前に敗北の兆候を示し始めたことに、淫靡な笑いを浮かべると、そのまま濡れた指を女の口の中にねじ込み、自分の股間からしみ出た粘りのある樹液を味あわせた。

女は羞恥に顔を赤く染めたまま、無言で口内にねじ込まれた小島の指先を舌で拭った。

しおらしい女の変化に淫靡に口元を歪めると、

「上の口はまだシラを切り通しているが、下の口はさっきから何かを言いたくて仕方が無いようだな。もっと喋り易いようにしてやろうか？」

と、天井に仕掛けられた滑車から垂れる別のロープを下ろすと女の右足の膝頭に結び付けた。

そして、女の脚を繋いだまま、小島が思い切りロープを引き上げたため女の右脚は大きく前に引き

上げられ始めた。

抵抗しようにも男の力に抗しきれず、見る見る股間の恥ずかしい部分を男の目の前に露わにして行く自分の姿に体を震わせて悲鳴を上げた。

女の片脚を胸の高さまで前に引き上げた所で、小島は縄止めをした。

小島の目の前にはこれまで濃密な陰毛に隠されていた女陰が、最早隠すことも儘ならず、その赤黒い姿をまざまざと晒していた。

卑劣な憲兵将校は開き切った女の股間の前に膝を折ってしゃがみ込むと、両手の指を使って熟れた女の厚い肉襞を広げ、その奥底を探り始めた。

女が羞恥に顔を歪め、止めてくれるように涙を流して哀願したが、小島は意に介することなく、その行為を続けた。

女の秘部に顔を近づけた小島は、大きくくつろげた女の華洞から山百合にも似た濃厚な香りが立ち昇り始めたことに気付いた。

この女体の僅かな変化が、暴力により蹂躪し、女性の心身ともに打ち砕くことに快美感を感じる小島の残酷性を再び呼び覚ました。

スックと立ち上がると、壁に掛けられていた黒い革を編み上げた太い鞭を手に取り、ビュッと空気を裂いて振り上げ、床にビシッと鋭い音を立てて叩き付けた。

それは、これまで女が目で見えて身体で味わって来たどんな鞭よりも禍々しいものであった。

鞭の太さは3センチ位ありそうで、長さは3メートル以上あった。

小島がその長い鞭を頭上で振り回すと、ビュービューと謂う台風のうなり声のような風切り音を上げた。

鞭を猛烈な勢いで振り回す小島の目に宿った残酷な輝きを見て、恐怖に襲われたのか、声にならない悲鳴を上げ、身動きの出来ない体を振って残忍な憲兵の魔手から少しでも逃れようとするかのように身を揉んだ。

「これから、お前は悲鳴を上げてのたうち回り、自分が女に生まれてきたことを死ぬほど後悔するようになるぞ……。何時までも自白しないお前が悪いんだぞ…」

残酷な目で片頬を歪めると、手にした長い鞭をビシッと女の足下の床に激しく打ち付けた。

その床を打った強い衝撃は、ビリビリと床に着いた足まで響いて来た。

ついさつきまで、小島の熟達した手技の前に女体に秘められた肉欲を掻き出されそうになっていた女で在ったが、今やその様な甘い感情は吹き飛ばされ激しい恐怖に苛まれるのであった。

これからこの男は、自分にどんな恐ろしい責め事を仕掛けてくるつもりかと、ブルブル震えながら

青ざめ恐怖に打ち震える女の目の前でゆっくりと鞭を大きく振りかぶると、頭上で弾みを付けて振り回した。

鞭が空気を切り裂く鋭い音に続いて、ビーンッという甲高い打撃音を上げて、女の開き切った股間で撓った。

小島は女体の最も鋭敏な箇所を狙いを定め、正確に女体の中心部に鞭を打ち当てたのだった。女体の中でも最も柔らかく敏感な神経が集中する箇所に太い革鞭を受けた衝撃が、電気が流れるように女の背骨を駆け抜け、息も止まるほどの激痛に、悲鳴を上げることも出来ず体を弓なりに仰け反らして、体をビクビクと痙攣させた。

女に息注ぐ暇も与えず、正確にコントロールした第二撃が再び女の秘所を襲った。

これまで他の憲兵からも鞭打たれることが無かった箇所に向けて、堪えることの出来ない敏感な柔肌を続けざまに激しく鞭打たれ女の脳裏に白い物が浮かんだ。

すうっと頭から血流が下がり女が意識を失ったのが分かった。

意識を喪失した女体が天井からロープで吊り下げられたままグッタリと弛緩して行く様子が見られた。

その時、弛緩した女の股間から黄色い水飛沫が滴り始めた。

意識を失い緊張を失った尿道を通して、膀胱内に溜まっていた熱い小水が溢れ始めたのだった。

そして、その熱い放水が鞭で傷付けられた秘部を濡らす時の激痛で、悲鳴を上げ、再び意識を取り戻した。

女は激痛に激しい悲鳴を発して身悶え続けたが、一度始まった放尿は最早止める事は出来なかった。

女は、憎むべき暴力行使者の目の前で小水を漏らしてしまうという失態を恥じて、羞恥に身悶えたが、痺れきった下腹に力が入らず自らの意志で押し止める事も叶わず、羞恥と激痛に苛まれ続けて、身も世もなくワンワンと泣き叫び続けていた。

激痛に狂った様に悲鳴を上げて泣き叫ぶ女の姿を冷たい目でじっと見詰めながら、鞭を再び振りかざすと、放水を続ける一点を狙って正確に鞭を打ち当てた。

鞭の勢いで黄色い液体と引き裂かれた粘膜から迸った赤い血が周囲に飛び散った。

その鞭の打撃は十分に傷付いた敏感な神経を集めた鼠蹊部の薄い粘膜を引き裂き、溢れ出た小水を傷口に練り込め、更なる激痛を与えた。

女は死にも勝る苦痛に悲鳴を上げ身悶えたが、体内と体外から襲い来る激痛に失神による安息も与えられる事は無かった。

何時しか膀胱内に蓄えられた小水は残さず放出を終えていたが、小島はなおも激しい風切り音を上げて鞭を振るい続けていた。

更に小島は何度も女体の中心部を目掛けて鞭を打ち据え続けたが、女ががっくりと項垂れ再び意識を失っていることに気づくと、鞭を床に落とした。

「この体勢では鞭で狙いにくいな・・・力が入らん・・・」

再び壁際に寄ると、其処に立てかけて在った大きな角材で作られた枷を手にした。

その枷は頑丈な檜の木で作られ、縦15センチ横5センチ程の長方形の断面で長さが1.5メートル程あり、穴が4個並んで開いており内側の2個の穴は両手首を固定するように直径が小さく外側の2個の穴は足首を固定するための大きな穴が開いていた。

そしてそれは、上下に2分割出来るようになっており、両手と両脚を同時に上下から挟み込むように固定されると、背を丸め大股を開いた形に身動き出来なくなってしまう責め具であった。

ズッシリと重い枷を引きずるように意識を失った女の足許に運ぶと、再び女を吊していたロープを弛めた。

手早く脚と吊してたロープと両手を括っていたロープを外すと、女はしどけなく股間を開いたまま、力無く床の上に倒れ込んだ。

仰向けに横たわる女の身体を足で俯せにさせると、枷の窪みに女の両足首を載せた。

女の意識はまだ朦朧としているようであり、激痛に神経が麻痺しているか身体にまるで力が入らない様子であった。

そして両手を手繰るように引き寄せ左右の溝に載せると、手早く枷の上半分を取り付て固定した。

両手首と両足首を枷に固定され、蝦のように身体を丸めたまま、女はほとんど意識が無いようで、苦痛に喘ぐように無意識に口をパクパクさせたままであった。

「女！目を覚ませ！」

意識の無い女に桶に用意していた水を浴びせかけた。

桶の中には予め濃い塩水が入れられていたので、塩水が傷口を襲う強烈な激痛に女は悲鳴を上げて目を覚ました。

そして、自分の両手両脚が大きな枷により一列に固定されてしまったことに気付いた。

「何をグニャグニャになっているんだ！シャキッと身体を起こせ！」

小島が女の身体に手を掛けて腰を上は無理矢理持ち上げさせた。

両手足を一列に固定されてしまったため、女の上体は大きく曲がり、股間を大きく捻じたまま尻を

上に持ち上げる形となり、上体を顔と豊かな胸で支える形となった。

重い枷で両手両脚をガッチリと拘束されてしまい両膝と胸で身体を固定させる形となってしまったため、容易に倒れることの無い体勢となった。

今や女は股間を大きく広げたまま閉じることも出来ず、暴力行使者に自分の羞恥の狭間に咲く二つの恥孔をマザマザと見せ付ける姿勢となっていた。

余りの羞恥に女は気が狂ったように泣き叫んでいた。

小島の目の前には小太りで肉付きの良い若い女の丸々とした双臀があった。

そして、まだ鞭跡の残されていない無傷な白い股座をじっと見詰めながら淫靡な笑みを浮かべた。

「まるで近的のようだな・・・」

頑丈な枷に下半身を拘束され前のめりに胸と顔で上体を支える姿勢を取られ、嗜虐者に向かって大きく突き出された白くて丸い大きな尻を見詰めながら、小島にはそれが弓道場の的を連想させた。

「そうすると、差し詰め、あの尻の中心の黒い尻穴は星という所か？・・・」と、ニヤッと笑った。

枷に固定され表に向かって大きく押し広げられてしまった真っ白な尻の柔肉の間にポツンと姿を見せる、色素の沈着した丸い肛口の周りが、弓道の的の中心の黒い円のように見えたのだった。

女は、自分の秘部を隠すことも出来ず、泣き叫ぶように無慈悲な憲兵に哀願を続けた。

そんな女の涙にも躊躇することなく、新たに眼前の現れた明確な的に向かってビュッと鞭を振り上げた。

鋭く風を切る鞭は的を誤ること無く、見事にその中心を打ち据えた。

激痛が菊座から脳天に駆け上がったのか、女は意味不明のわめき声を上げて身を震わせた。

女の激越な悲鳴が残酷な憲兵の心を更に燃え立たせるのか、更に鞭を振り上げるとその菊の花弁の中心に向かって二撃三撃を喰えた。

まるで高压電源に触れて筋肉が硬直したように、鞭で打たれた後の肛門がギュッと収縮した。

そんな女の強烈な鞭への心の準備を嘲笑うように、今度は女芯の割れ目に沿って鞭を叩き込んだ。

ふくよかな二つの肉丘を左右に断ち割るように革紐を編み上げた太い鞭が中心を抉った。

呵責無い責め苦に女が声にならない悲鳴を上げて尻を震わせた。

なおも尻の周囲に鞭を叩き込み白かった尻は今や熱を持って赤く腫れ上がっていた。

女は今は涙も涸れ果て悲鳴も出なくなったのか、唯鞭打たれる度にヒイヒイと声にならない悲鳴を上げ続けていた。

縦横に鞭を振るい白かった女の尻は見る見る赤く染まって行った。

小島はこれでトドメだと、最後の鞭を思い切り振りかぶると、渾身の力を込めて女の股間を縦に引き裂く様に打ち据えた。

狙いはあやまたず女の秘裂に沿って叩き付けられ、柔肉の間の繊細な神経が集中する部分を激しく打ち据えると、良く撓った鞭の先端はそのまま菊の華のような皺を押し広げその内部に没入した。

まるで真っ赤に熱した鉄棒を肛門に突き立てられた様に一瞬身体を硬直させると、次の瞬間、鞭の先端を直腸内に咥え込んだまま、身を仰け反らせた。

そして女の身体が弛緩して行くのが判った。目は完全に白目を剥き、口からはブクブクと泡を吹き始めていた。

意識は完全に喪失してたが、枷によりガッチリと拘束された身体はくずおれることなく、高く尻を擡げたままであった。

小島は手にしていた鞭の握りを離すと、女の傍に歩み寄り、自分の鞭による攻撃の成果を存分に検分した。

女の厚く成熟し肥大した二枚の厚い花卉は、今は大きく腫れ上がり赤黒く充血し、所々で血を滲ませていた。そしてその奥の細かい襞に覆われた箇所も薄い粘膜を引き裂かれ血を浮かべ無残な様を晒していた。

女の長い髪を乱暴に鷲掴みにして顔を自分の方に引き上げたが、うつすらと細く白目を見せる女は死んだように意識を取り戻すことは無かった。

蒼白となり死んだようにぐったりとしたままの意識の無い女の顔を見つめ続ける内に、小島は憑かれたように赤みを残す女の唇に自らの唇をそっと重ね合わせた。

そして、ズボンを脱ぎ捨て、下穿きを緩めると、いきり立つ分身を取り出して、肛門から鞭をまるで長い尻尾の様に垂らして尻を高く擡げたままの意識の無い女の腫れ上がった股間にあてがった。狭い入り口を太い小島のモノでこじ開けながら、流れ出た血が潤滑剤となり、滑りが良さそうだとほくそ笑んだ。

傷だらけの狭い狭間を突いて小島の逞しい肉茎が徐々に押し込まれて行った時、激痛に女が再び目覚めた。

そして、最期に夫を裏切ることのなってしまった運命を呪う様に断末摩の様な傷ましい悲鳴を上げた。

女の哀切の叫びが逆に小島の残忍な欲望を燃え上がらせたのか、足枷に固定され身動き出来ない女を背後から激しく腰を動かして突き続けた。

分厚い尋問室の扉を通して、女の悲鳴が外部に漏れることは無かった・・

「そうか？そんなに良い女だったか・・・」

憲兵隊隊舎の6畳ほどの狭い休憩室で、小さなテーブルに向かいながら中島憲兵中尉が呟いた。

テーブルの右向かいに座った大島少尉が、ぬるい麦茶を口に含みながら、先ほど見かけた貴婦人が如何に浮世離れした美人であったかを思い付くだけの表現を駆使して中島達に説明しようとしていた。

しかし、いくら言葉で表現しようとも、大島の乏しい語彙では、その貴婦人の美しさを表現仕切れないことに、もどかしさを感じている様子が在り在りとしていた。

「ああ、俺も何年か前に一度見かけたことがあるが、それは、それは、この世のものとは思えないような大層な美人だったな・・・」

中島中尉を挟んで、大島少尉の向かいに座った小島准尉が瞼と閉じて、その時の情景を思い出しているのか、ウツリとした表情を浮かべながら同意した。

しばし、妙齡な貴婦人の回想の余韻に浸ったようであったが、現実に戻り、

「そうか・・・あの時の娘達も大きく成長したんだな。」

先ほどの取り調べについて上に報告するに当たって、自分の破廉恥な行為を隠し、でっち上げた供述に矛盾が無いよう確かめながら出鱈目の調書の下書きを便箋に鉛筆を走らせながら呟いた。

中嶋中尉、大島少尉、小島准尉の三人は階級や年齢は異なっていたが、隊内では仲が良く、階級と歳の差を離れて何時も一緒に居る時間が多かった。

小島准尉は二等兵で軍隊に入ってから昇進を重ねて、20年近く掛けて、苦勞の末、一兵卒から昇進出来る上限の准尉までになった男であった。いわば軍隊の一から十まで知り尽くした男であり、その長年の憲兵での経験を買われて、士官学校を卒業したての若い中島と大島の教育係りとして任命されたのが、この三人の関係の始まりであった。

従って歳も経験も大きく懸け離れていたが、程なくこの三人に共通する秘めた性格を互いに理解し合うことにより、三人の関係は深く結び付けられて行ったのであった。

成績優秀の中島の方が先に中尉に昇進したが、大島には特に嫉妬を覚えることもなく、階級と年齢を飛び越し、お前、俺の関係が続いていた。

「金田 静江、現在39歳、山田コンツェルンの総帥の娘に生まれ、18歳の時に金田伯爵家に興入れし、2女をもうける。

長女緑子 現在20歳、皇族や華族の子女が通う、ひめゆり女学院を卒業後、さる皇族との婚姻が内定しており、現在花嫁修行中。

次女順子 ひめゆり女学院の3年生だから現在 18 歳くらいだろう。

この順子という名前は、英国大使館に長らく勤務していた金田伯爵一家の中で、英国滞在中の6月に誕生したことにちなみ英語のジューンから名付けたそうだ・・・」

中島が突然金田伯爵家の素性をスラスラと話し始めたので、小島と大島は驚いた顔をして、中島の方を見つめた。

「金田伯爵は英国滞在経験も長く、英国通で通っている他、満州や朝鮮の企業にも出資して、その財力は他の貴族と比較しても非常に大きい。大島、お前の見た白亜の豪邸の他にも国内外各地に瀟洒な別荘を幾つも構えているらしい。」

中島は二人に構わず語り続けていた。

「戦前は広い屋敷内に多くの使用人やメイドがかしづいていた様だが、戦局の悪化に伴い、男は徴兵、女は勤労働員に暇を出し、現在屋敷で働いているのは、古くから仕える女中頭と執事の二人だけだそうだ。お前の見た車を運転していた男は、多分この執事だろう・・・」

床に立てた軍刀の柄に両手の平を置いてその上に顎を載せながら、前屈みの姿勢で、中島が急にまるで調書でも読み上げるように詳細に例の貴族家の略歴を話し始めたので、

「中島！お前やけに詳しいじゃないか？！」

と、大島も小島も驚いた声を上げた。

「管内の重要人物の情報ぐらい諸ん^{そら}じておくものだ。」

と、二人の呆気にとられた様子も気にせず、何食わぬ顔で中島が応えた。

「もともと、俺はそう云った情報だけで、実際に見たことは無いが、大層な美人らしいな・・・」

「あー、あんな美人を一生に一度で良いから思い切り抱きしめてみたいものだ・・・」

と、小島がうっとりとした眼で呟いたので、

「違うだろう？小島、抱きしめてみたいじゃなくて、思い切り拷問に掛けてみたいだろう？」

と、それを聞き咎めた大島が面白半分に混ぜ返した。

その言葉に、瞬間小島の残忍な本能が呼び覚まされたのか、

「そうだ、その通りだ、・・あの藤長けた貴婦人を素っ裸にひん剥いて、麻縄で身動き出来ないように縛り上げ、泣き叫ぶ体に鞭を振るい、バラバラに碎け散るまで責め苛みたい・・」

深窓に育った令婦人を様々な残酷な拷問にかけ責め苛む陰惨な光景が眼に浮かぶのか、目に妖しい光を浮かべ異常な狂気を伴った声で小島が呟いた。

「よせ、よせ、そんな事、世の中、天と地がひっくり返っても出来るものか・・一般庶民なら、ちょっと綺麗な女が居たら、適当な容疑をかけて引っ張って来れるが、貴族様が相手では手の出しようが無いぜ！」

小島の興奮した姿をからかうように大島が声を掛けた。

その大島の言葉に狂気の妄想から現実に戻され、冷静さを取り戻すと、ばつが悪そうに、そうだなと肯くのであった。

「やるか・・」

相変わらず軍刀の柄の上に顎を載せたまま、中島がボソッと呟くのを聞いて、大島と小島がエッと言う顔をして中島の方を振り向いた。

「俺の掴んだ情報によると近々御前にて会議が開かれるらしい・・いや、もう既に何度も会議は行われているだろう・・」

と、二人の男の視線を浴びながら中島が静かに話し始めた。

「御前会議など、もう何回も開かれているだろう。大方、この難局を乗り切るため陸軍大臣や海軍大臣や諸大臣がお上の前で方針を決めるだけだろう・・」

中島の独白を聞き咎めた、小島が聞き返した。

そんな小島の暢気そうな質問に対して、鋭い目で正面を見つめたまま、

「今回の御前会議は、ただの御前会議では無い・・日本の無条件降伏について話し合う御前会議だ・・」

突然中島の口を衝いて飛び出した日本の無条件降伏と言う言葉を耳にして、大島も小島も思わず凍り付いた様に青くなり、誰か他に聞き耳を立てている人間が居るのではないかとキョロキョロと辺りを見回した。

「めったなことを言うんじゃ無い、そんな事を言ったら・・」

「そんな事を言ったら、憲兵さんに捕まえられるか？・・止めろよ、憲兵は俺たちだ。」

真っ青になって口走った言葉の尻を中島に取られ、軽くいなされたことにより、大島にも小島にも少し心の余裕が出て来た。

「絶対国防圏と豪語していた南洋の日本領土は、連合軍の飛び石作戦により次々と玉砕を繰り返しており、沖縄も敵の手中に落ちた。…帝国の諸都市は連日B-29の猛爆に曝され対抗することも出来ない。…東北の雄都釜石市は沖合を遊弋する米英仏連合軍戦艦部隊の艦砲射撃を受け灰燼に帰した。津軽海峡は寸断され今では北海道の物資が本州に届く事は無くなった。…最早、大日本帝国には制空権も制海権も無い。…そして広島には新型爆弾が投下された。…僅か一発の爆弾により中国地方一の大都市が消滅したようだ。…そして満州では日ソ不可侵条約を破棄したソ連軍が国境を越えて襲いかかり、勇猛を誇った関東軍も為す術も無く、敗退を繰り返している。…そして長崎にも新型爆弾が…」

「もう、いい！だから一億玉砕だろう！」

中島の陰々滅々とした話しに堪えかねたように、大島が立ち上がると大声を立てた。

「そうだ。上の方も他人が死ぬ分には玉砕せよと景気の良いことを言っていたが、いざ自分が死ぬ段になるとやはり自分の命は惜しい。…しかし、そんな事を自分の口から言えば、それこそ怖い憲兵さんに捕らえられるからな…」

冷静な口調で中島が呟くように言った。

「だから、お上の玉声を使って代わりに言わそうと言うのか？」

小島が詰め寄ると、中島は正面を見詰めたまま無言で大きく肯いた。

「糞！汚い奴らだ！」

大島も小島も同時にうめくような声を上げた。

汚い奴らだ…、汚い奴らだ…、汚い奴らだ…、と叫ぶ声が脳裏の暗闇の中を銚子のように響いた。

しかし、自分たちの力ではどうにもならないとの無力感が頭をもたげ始め、この銚子を次第に小さくしていった。

「…日本が負けたら、どうなるんだ？」

少し冷静に戻って、大島が聞いた。

「どこの国の歴史を見ても敗戦国は惨めなものだ。戦勝国にケツの毛一本まで筆り取れる。先ず一生掛かっても払いきれない程の賠償金を求められる。勝者は我が者顔で国土を闊歩し、日本人は誇りを失って、勝者の顔色を窺って生活することになり、女達は戦勝国の男共に暴行を受けるか、逆に自分達から身売ることになる…」

中島の話す悲惨な敗戦後の状況を思い画くと、小島も大島も悲痛な思いに唇を噛みしめ悔しそうに首を振った。

「しかし、重要なのは日本がどうなるかではなく、俺たちがどうなるかだ…」

と、中島が言葉を継いだ。

「どうなると言うんだ？」

ゴクリと唾を飲み込んで、小島が問い返した。

「勝利者が裁判を開き、敗者を戦争犯罪者として裁くことになる。・・・これまで国内の反戦主義者を捕まえて、戦争に協力して来た俺たちが真っ先に裁判にかけられることになるのは明白だ。・・・特に小島、」

相変わらず前屈みの姿勢のまま、中島が醒めた目で小島の方をギョロツと睨んで話を継いだ

「・・・貴様、尋問と称して、撃墜したB-29から脱出して来た米軍航空兵を拷問にかけて責め殺しているだろう。・・・国際法でも捕虜の虐待は厳重に禁止されている・・・死刑は免れないな・・・」

死刑と聞いて小島の顔が真っ青になった。

「よしんば、死刑を免れたとしても俺たち全員残りの一生を牢獄に繋がれて、もうこんな面白い事は出来なくなる分けた・・・」

中島の話の後、暫しの重苦しい沈黙が三人を支配した。

そして、その沈黙を引き裂くかのように、

「やるか！」

と、勢い良く大島が席を立った。

「よし、やろう！」

小島が書きかけの調書をテーブルに投げ出すと、持っていた鉛筆を両腕でへし折って立ち上がった。

左右で勢い良く立ち上がった二人を交互に横目で見ながら、中島もゆっくりと腰を上げた。

決行

「一体全体、こんな時間に、こんなに拷問道具をトラック一杯に積み込んで、何処に行こうと言うんだ？」 小島准尉に命じられた牛田軍曹が部下を使って、荷台に幌を付けた軍用トラックに拷問道具を積み込ませながら独り言を言った。

三角木馬や大きな石板など重い拷問道具を荷台に積み込む牛田も部下の下士官兵らもぐっしょり汗に塗れていた。

「ご苦労、牛田軍曹！」

気が付かない内に背後に立っていた小島から声を掛けられて、牛田達は慌てて、気を付けの姿勢を取り敬礼した。

小島は軽く敬礼を返ししながら、幌を掛けたトラックの荷台一杯にうずたかく積み込まれた多数の拷問道具を見やりながら、満足そうに肯いた。

「我々三名は、大隊長の特命により、これより某所に出動する。この作戦は極秘事項である。見聞きした事は絶対に口外しないように！」

運転席から顔を出した小島が、牛田以下の下士官兵に命じた。

こうして、大島、中島、小島の三名を載せたトラックは、憲兵隊の兵舎を走り出て、夜の闇の中に消えていった・・

「これで良し・・」金田伯爵邸の塀に横付けしたトラックの運転席の屋根に登った大島が、屋敷内に引き込まれている電話線を電信柱の所で切り離しながら呟いた。

そして、音を立てないように鋳物製の門を開くと、トラックを屋敷内に侵入させた。

しかし、敷石を鳴らして敷地内に侵入する車の音は、やはり家人に聞き咎められたようだ。

玄関の扉を薄く開けて、誰かがこちらの様子を窺っている事が、室内の明かりを受けて逆光に照らされた人影により分かった。

この人影の動きに気付いた中島は、「返って、好都合というものだ。」と、ボソッと呟いた。

車が敷地内に入って来る物音に最初に気付いたのは執事であった。

玄関の扉を薄く開いて、扉の陰から外の様子を窺っていると、軍用トラックが近付いて来て、玄関の傍に横付けするのが分かった。

そして、トラック中から腰に軍刀を帯びた三人の憲兵将校が降りて、軍靴の音を響かせながら建物に近付いて来る様子が映った。

異様な気配を感じた執事が慌てて扉を閉めようとしたが、中島が一瞬早く扉を手で押さえると、執事を押し除け、無言で建物内に侵入した。

玄関を入った所は、吹き抜けのロビーとなっており、天井からは高さ 3 メートル以上はあろうかという巨大なシャンデリアが吊り下がっていた。大小のガラス玉をちりばめたシャンデリアは煌びやかに室内を明るく照らしていた。

壁には、立派な額に納められた多数の肖像画掛けられていた。この家の家系に連なる人たちの絵なのだろうと思った。

高い天井を見上げながら、この玄関ロビーだけで自分の狭い家がスッポリ入ってしまいそうだと感じた。

「お待ち下さい、旦那様は只今食事中です・・・」

問答無用とばかり、ずかずかと三人の憲兵が屋内に入って来るのを執事が必死に押し止めようとしたが、それに構わず、中島らは相変わらず、ほとんど言葉を発すること無く歩み続け、ついに家人が晚餐中の食堂まで達した。

食堂は40畳ほどの広さの洋室であった。

縦長の部屋にはロビーのシャンデリアよりは遙かに小振りではあるが、等間隔に3基の瀟洒なシャンデリアが高い天井から吊り下げられ、彫刻や飾りが施された白い壁面には、シャンデリアとデザインを統一した壁灯が幾つも取り付けられ、室内を煌々と照らしていた。

部屋の中央には4人家族には大きすぎる長いテーブルが置かれ、テーブルの上座には、この屋敷の主である金田伯爵が座り、間を置いてその向かい側のテーブルの端に夫人が座り、2人の娘が母親を挟む様に左右に座り食事をしている最中であった。

伯爵の後ろには、50歳代と思われる恰幅の良い女中頭が立ち、家族の食事の世話をやいていた。

各人の前には、幾皿もの料理が並べられていた。

それでも戦前の華やかかなりし頃と比べると、質素な食事になったのかも知れないが、肉や野菜など色々な料理が並べられ、配給に頼る庶民の食生活とは比較にならないほど豪勢なものであった。

金田伯爵は、執事が狼狽しながら必死に押し止めようとするこの突然の闖入者を眼鏡越しにちらりと見たが、何事も無かったように悠然と食事を続けていた。

夫人や娘達もそこで何事も起きてないのかのように会話を楽しみながら食事を続けていた。

普通の庶民なら憲兵の姿を見るだけで、真っ青になり周章狼狽して取り乱すのが常であるが、この長年に渡り庶民を睥睨して来た貴族に取っては、食卓に虫が一匹入った程の影響も与えないのだろうか？

人から恐れられる憲兵に向かって、この尊大な態度を示す家族に対して、中島は腹の底から何かが沸々と湧き上がるのを感じていた。

「金田伯爵！ 貴様には連合国へ内通したスパイの嫌疑が掛けられている。これより取り調べを行う！」

中島が相変わらず豪華な食卓椅子に腰を下ろしたまま、泰然と食事を続ける金田伯爵に向かって叫んだ。

「スパイの嫌疑だと？何をくだらない事を・・・」

伯爵の人生において、これまで庶民と直接口を聞いた経験は無かったが、最早、執事に任せていたのでは、埒が空かないと思ったのか、食事の手を休め、ゆっくりと椅子から立ち上がりながら言った。

その声には、怒気も恐怖感も無く、ただ呆れたというような落ち着いた声であった。

「憲兵聯隊の聯隊長とは、私も日頃から懇意にしている。今夜のことは私から聯隊長に伝えて置くから、今夜はこのまま帰るように。」

これが何世代にも渡り庶民を睥睨して来た、貴族の威厳と云うものだろうか？少しも恐れを感じることもなく、見下した眼で静かに、しかし威圧感を持って喋る伯爵の姿は、逆に中島を圧倒した。

中島に向かって近付いて来る伯爵の細身で小柄な体が急に大きく見えた。

相変わらず他の家族は楽しげに食事を続けていた・・・

このままでは、気圧されると感じた中島の右手が咄嗟に動いた。

中島の拳をまともに頬に受けた伯爵の小さな体が吹き飛び、掛けていた眼鏡が大理石の床にカラカラと音を立てて転がった。

これまでの和やかな食堂の空気を切り裂き、一瞬にして恐怖が食堂内を支配した。

貴族として生まれ、これまで優雅に育って来た伯爵にとって、人から顔を殴られる事など、今までの人生で一度も無かったであろう。

手を床に付き尻餅を付いてこちらを見上げる、伯爵の顔面は蒼白となり、目には先ほどまでの尊大さは消え失せ、恐怖の色を宿していた。

日頃から鉄拳制裁で鍛えられた軍人の拳をまともに顔面に受けて、恐らく歯の2、3本は折れたのだろう。

口からは真っ赤な血がだらだらと流れ出ている。

少しして、驚愕による硬直の呪縛から解けたのか、夫人や娘達がキャーと大きな悲鳴を上げた。

突然、女中頭が壁に向かって走り出し、壁に取り付けられた電話の受話器を持ち上げ、何処かに電話をしようとした。

「もしもし！もしもし！・・・」

応答の無い電話に向かって女中頭が悲鳴にも近い声で叫び続ける。

電話が継がらない事を知っている中島は、余裕を持って女中頭の背後に回り、落ち着いて女中頭から受話器を取り上げるとゆっくりと電話機に戻した。

「おい！お前！何処に電話しようとしていた？」

中島が居竦ませる様な眼で女中頭を睨み付けた。

「警察へ・・・」

恐怖に体を震わせながら、女中頭が応えた。

「何？警察だと！馬鹿者！スパイが警察に電話する訳無いだろう！大方、仲間のスパイ組織に連絡を取ろうとしたのだろう？」

平手で女中頭の頬を思い切り殴ったので、女中頭はその場に崩れ落ち、殴られた頬に手を当てながら恐怖に身を縮ませた。

「どうも貴様らは憲兵を舐めているようだ！これから憲兵隊の恐ろしさをとくと見せてやる。」

中島が恐怖に硬直する家族をゆっくりと見回しながら宣言するように言った。

大島と小島が食堂に石抱きの拷問に使う、十露盤板と大石を持ち込んだ。

「どうだ、本当の事を言う気になったか？」

不気味な拷問道具を見せつけながら、中島が女中頭に迫った。

「本当です！本当に警察に電話しようとしたのです・・・」

恐怖に震えながら女中頭が必死に訴えた。

「えーい、強情な奴だ！」

中島が、大島と小島に目配せをした。

大島と小島がたちまち着物姿の女中頭から着物を剥ぎ取り、長襦袢一枚にすると身動き出来ないように高手小手に縛り上げた。

更に十露盤板の効果を上げるため、長襦袢の裾を捲り上げ、腰巻きを奪い取った。白い脛から大腿、更にほの暗い股間まで露出したが、ぶよぶよした弛んだ体は中島達の食指をそそるものでは無かった。

十露盤板の三角形に良く削り上げられた幾本かの横木の上に女中頭を正座させた。

剥き出しにされた脛に尖った台座が食い込み、良く肥えた自分の体重を支えるだけでも激痛が女中頭を襲った。

苦痛に身悶えする女中頭の剥き出しの太ももの上に、重さ40キロ以上ある伊豆石と呼ばれる大きな石板を載せた。これまで経験したことの無い激痛に、絞り出すような悲鳴を上げ、白目を剥き、油汗を流した。

「どうだ、少しは吐く気になったか？」

中島は長靴を履いた右足を石板の上に乗せると、前屈みとなり体重を右足に掛けながら聞いた。

「スパイ組織は何処にある？人数は？連絡方法は？」

石に乗せた足で石をグリグリ揺すりながら問い詰める。

「知らないです！本当に何も知らないのです！」

絶え間ない激痛に喘ぎながら、全身を真っ赤に染めた女中頭が、冷や汗を流しながら、絶え絶えに喘ぐように応えた。

「お前は本当に強情な奴だな。」

にやりと口元を歪めると、大島と小島に更にもう一枚伊豆石を重ねるように命じた。

二人掛かりで持ち上げた巨石をドスンと音を立てて、女中頭を責め苛む石板の上に積み上げた。

その瞬間、女中頭は全身を硬直させると、声を上げる事もできず、全身は蒼白となり、まるで水を頭から浴びせられたかのような大量の汗をどっと流すと、前のめりになり意識を失ってしまった。

少しすると、十露盤板の溝を伝い、大量の黄色い水が溢れ出し、大理石の床に流れ出した。

この凄惨な光景に貧血を起こしたのか、姉が蒼白な顔となって、声も上げずに崩れ落ち、慌てて母親に支えられた。妹は全身をがたがた震わせながら、眼にいっぱいの涙を浮かべて黙って立っていた。

「これで貴様らのスパイの容疑は濃厚となった！これより全員の取りしらべを行う！」

恐怖に凍り付く全員を見回しながら中島が宣告するように言った。

怪我をした女中頭と執事と伯爵を別室に隔離して、食堂には母娘だけが残された。

「規則により、取り調べの前に身体検査を行う」

ニヤリと口を歪めて中島が言った。

「全員来ているものを脱ぎ、裸になるんだ！」

と脅すように命じた。

突然の理不尽な命令に女達は悲痛な悲鳴を上げた。

しりごむ女達に「早く脱がないか！」と軍刀の先で激しく床を叩き命令した。

女達は男達の剣幕に圧倒されて、つい今し方、目に焼き付けさせられた凄惨な拷問の凄まじさに

心を取り乱し、恐怖心が羞恥心に勝って、おどおどと身に着けている物を脱ぎ始めた。

着物姿の伯爵夫人は、何本もの帯締めを緩め、長い帯を解き、着物を肩から滑らせるように落とした。

更にその下の長襦袢の紐をシュツ、シュツと衣擦れの音をさせながら解いて行く。

娘達もおどおどしながらブラウスのボタンを外しスカートのホックを外した。

女達が一枚一枚着ている物を脱いでいく扇情的な光景に男達の眼は釘付けとなり、生唾を飲み込んだ。

食堂の中は女達が発する色香と男達の劣情で熱い空気が渦巻いていた。

生活態度が自然と現れるのか、女達はこんな時でも自分が脱いだ衣類を脱ぎ捨てたままにせず、一々畳んで足下に積み上げていた。

肌襦袢姿となった夫人が、顔を真っ赤に染めて、自分の胸のラインを見られるのを恐れるかのように手を前に交差しながら

「これ以上はお許し下さい。」

と、羞恥に震えながら小さな声で哀願した。

娘達もシュミーズ姿となり、腰を下ろして小さく身を屈めて震えている。

恐怖と混乱の中で、命令されて脱ぎ始めたが、やはりそこまでが自分の独力で脱げる限界のようであった。

さっきまでの貴族の令夫人としての尊大さは、全く影を潜め、憲兵の暴力の前に恐怖に怯えるだけの、無力な女となったことに、満足しながら、傘にかかったように、

「ならぬ！素っ裸になるのだ！」

と、大声で命令した。

女達は、この理不尽な命令対して、涙を流しながら嫌々をするように首を振るだけであった。

業を煮やした小島と大島が夫人に近付き、小島が前から夫人の両腕を掴まえて弱い抵抗を封じた。その間に夫人の背後に回った大島が腰紐を解いたので肌襦袢の前がはだけ、前から見つめる小島の眼に、喉から胸の谷間を通して腹まで白い肌が見え隠れした。そして、肌襦袢の襟を両手で掴むと一気に肌襦袢を二の腕まで引き下ろした。

染み一つ無い白い肌がシャンデリアの明かりを受けて艶々と輝き、張りのある白く豊かな乳房が露出した。

その大きさと形の良さに見惚れて男達がホーッとため息を吐いた隙に、小島の手を振り払った夫人は、反射的に両方の手を交差させて乳房を覆い隠した。

ところが、必死の思いで両手を固く前に結んでいる間に、大島は、そっと夫人の湯文字の紐に手を伸ばすと、たちまち解いてしまった。

これに気付いて湯文字の紐を解こうとする大島の手を押さえようと乳房を隠していた手を外した隙に、小島が前から夫人の乳房を驚掴みした。

二人の憲兵の息の合った連係プレーにより、堪らず上げた夫人の悲鳴を楽しそうに聞きながら、有無を言わず、夫人から肌襦袢を剥ぎ取り、支えを失って緩くなった湯文字を奪い去った。

一瞬白い豊かな太股の間に黒い飾り毛が映った。

全裸に剥がれ、全身を羞恥に赤く染めて、泣きじゃくりながら、その場にしゃがみ込み体を小さく屈めて、両手で必死に隠そうとする夫人を後に残して、次に娘達に近付くと二人掛かりで、娘達が泣き叫ぶのも構わず、一切の下着類を無理矢理に剥ぎ取った。

身に纏う物を一切奪い取られて嗚咽する三人の女を壁に沿って立たせた。

正面を向いた女達は、羞恥に身悶えしながら、大腿を深く閉じ、前屈みになりながら手で胸と股間を押さえて、ぶるぶると震えながら少しでも男達への露出を減らそうとしていた。

煌々とした食堂のシャンデリアと壁灯が羞恥に打ち震える女達を赤々と照らしていた。

母、姉、妹と歳の順に並べると女の外形の変遷が良く分かった。

母親は、今まさに女盛りで手に抱えると重そうな豊かな乳房を持ち、腹回りはほっそりとしているが、下腹から臀に掛けて柔らかな肉をたっぷりと付いていた。

必死に手で覆い隠そうとしているが、指の間からこぼれるような良く繁茂した飾り毛は、女としての盛りを迎えていることを示しているようであった。

姉の体は、今まさに開花を迎えようとする、綻び始めた蕾に例えられよう。

お椀型の形の良い乳房と桜色の小さな乳首が清純な乙女を感じさせる。

下着をむしり取る時見た飾り毛も、ようやく生え揃ったような初々しさを感じさせた。

妹はまだ固い蕾に例えられよう。ようやく胸も大きくなりつつあるが、姉程の発育には達していない。

飾り毛もまだまだ疎らな印象であった。

全体的にまだ少女の体を残したまま、体の一部が大人の体に向かいつつある途中という感じであった。

流石に育ちの良い女達は違うと、床の上に丁寧に折りたたんで積み上げられた衣類を見つめながら、大島らは思った。

衣類の中に何か隠していないか検査する一と、理由を付けて、高級な手にしっとり馴染むような衣

類を一つ一つ乱暴に取り上げ、中に何か入っていないかを確認し始めた。

これまで触れた事も無いような繊細な繊維の肌触りに、日頃の洗いざらしのゴワゴワした綿製品しか知らない大島に取って、贅沢三昧の暮らしに明け暮れ、常日頃から豪華な衣類を身に付けていた貴族の生活に嫉妬を覚えるのであった。

男達に乱暴に奪い取られて散乱する脱ぎ捨てられたままの絹で織られた清楚な下着を手にする
と、まだ暖かさが残る衣類の表面から女の香りが立ち上って来るように感じられた。

思わず下着に顔を埋めたい衝動に捕らわれたが、女達を前にした手前ぐつと堪えた。

中島は3人並んだ中から、先ず母親を連れてきて壁に向かって立たせた。丁度壁の明かりの直ぐ
下で、熟女の熟れた肌が、ほの白く艶めかしく照り返されていた。

中島は夫人を前屈みの姿勢にすると両手を壁に付かせ、両足を思い切り開くように命じた。

壁に向かって直立したまま涙を浮かべてイヤイヤと首を振る夫人に対して、横に陣取った小島が
無理矢理夫人の両腕を掴み、両掌を壁に押し当てさせ、両腕を大きく前に延ばしたまま、夫人の
上体が壁に向かって直角になる様に腰を押し、尻を引かせて強制的に羞恥の姿勢を取らせた。

更に閉じていた夫人の両足首を邪険に長靴で蹴って、尻を中心に扇の様に大きく開かせた。

二人の娘は、背後から大島に見張られており、母親が屈辱的な身体検査の姿勢を取らされるのを
涙を浮かべながら見詰るしか無かった。

女に取って耐えられない恥ずかしい姿勢を取られ、最も隠しておきたい女の大事な箇所が背後
から覗く男達の眼に丸見えになった。

得体の知れない残忍な憲兵の前に、隠すことも許されず裸身を曝す羞恥と恐怖心から、夫人は
顔を真っ赤に染めて、深くうなだれ、カチカチと歯を鳴らして体を震わせていた。

肉付きの良い柔らかな双臀の狭間から、普通なら人目に曝される筈の無い、二つの秘部が中島
の目に焼き付いた。

適度に繁茂した飾り毛に囲まれた女の花園の最奥に位置する秘密の孔を隠す可憐な襞やその
僅か上に位置する、菊の花にも似た放射状の深い皺を寄せる、恥ずかしい孔が、中島の視線を
隠しようも無く受けて、羞恥と恐怖のためか、ピクピクと蠢いているようすが在り在りと見られた。

これから、この無垢な貴族の麗人達に思いの限りの暴虐を尽くすことが出来ると思うと、流石の中
島も緊張と興奮で口の中がカラカラに乾くのを感じた。

「女は、体の各所に武器や機密文書を隠す所を持っているからな、..これも規則で取り調べの前
に確認することになっている。」

と、両手に手術に使うような薄い黄色いゴム手袋を嵌めながら、乾いた声を上げた。

まず、夫人の口をこじ開け人差し指と中指を突き入れて口内を掻き回した。

不快なゴム臭が口内を襲い夫人が顔をしかめた。

口内を一頻り掻き回して、何も隠している物が無い事を確認した中島は、唾液でたっぷり濡れた手を下の方に持って行った。

小島が中島の作業をやり易い様に夫人の尻たぶを掴むと大きく左右に思い切り押し広げた。

秘められていた部分が全開となって男達の目に晒す羞恥に夫人がヒィ！と悲鳴を上げて腰を震わせた。

大きく広げられた股の間からは、淡く董色を帯びた女の割れ目と菊の蕾が露出していた。

男たちの目に自分の秘部を見られる羞恥に涙を流し小刻みに腰が震え続けていた。

女の身だしなみとして下の毛を整理しているのか、成熟した密度の高い豊富な毛量であったが、下品な広がりを見せる事は無く、女陰や肛門の周辺にほとんど無駄毛は無く、ツルツとした祖頸部が覆い隠す物無く男の眼下にあった。

中島の指が陰唇に触れた時、反射的に女がブルツと体を震わせた。

左の指で幾重にも折り畳まれた柔らかい褄をかき分けて、女の花洞を露わにすると、唾液で濡れた人差し指と中指の二本の指をその中に装入した。

女がウツと小さな呻き声を立てた。

薄いゴムの層を通して、柔らかで温かい極上の夫人の内部構造を確認した。

二本の指を丹念に蠢かせて、暖かく柔らかな夫人の体内を堪能した。

夫人は中島の隠微な指使いに、羞恥を抑えきれないように、目に涙を溜めながらウツウツと短い悲鳴を上げて、腰を悶えさせた。その都度、膣口や膣壁が絞まり中島の指を締め付けた。

中島は、指の腹で肉洞内に無数に蠢く絨毛のような小さな突起をまさぐり、夫人の締め付け具合を感じながら、この適度に性交経験を積んだ貴族の令婦人は、男に快楽をもたらすことが充分出来る体内組織を持って居る事を確信した。

例え、今そのことを本人は自覚していなくても、少し手を加えれば、男を夢中にさせずにおかない体を開発可能であることを中島は、これまでの経験を通じて知っていた。

出来ればゴム手袋越しでは無く、素手でこの極上の内部を掻き回したい欲望に捕らわれたが、いいさ、直ぐにここの穴も後ろの穴も更には二穴同時に思い切り蹂躪してやるーと、思い直し、指を抜き出した。

そして、最後に残った上の穴に唾液と肉洞から滲み出た体液で十分に濡れた中指を突き立てた。

ぴったりと閉ざされた深い穴とそこから伸びる深い皺を寄せる、菊の蕾の中心に指を押し付けると、そのまま有無を言わず力尽くで、蕾の中にズブリと差し入れた。

医者にも触れられたことの無い最奥の秘められた部分に指を突き立てられ、思わず悲鳴を上げると反射的にその秘孔の周囲の筋肉を締め付けた。

逆に、中島はそんな婦人の狼狽えぶりと指を締め付ける筋肉の痙攣を楽しむかのように、腸内にズブズブと埋め込んで行った。

生まれて初めて外部から異物を押し込まれる痛みと羞恥に夫人が顔を歪めた。

元々構造的に内部には襞が無く、ツルツとしたホースの内側のような感触は前の穴ほどの感激は無いが、指を痛い程締め付ける強い括約筋の緊張感が心地良かった。

悲鳴を上げて苦痛に身もだえする母親を見て、「お願いです、お母様を許して下さい。」と、娘達が涙をすすりながら哀願して、思わず母親の元に駆け寄ろうするのを背後から大島が肩を掴んで制止した。

ようやく母親を解放すると、次に姉の緑子を捕まえて、母親が立っていた位置に同じ姿勢で立たせた。

自分の直腸内を搔き回した指を娘の口内にねじ込もうとしているのを見て、夫人がおろおろと悲鳴のような声を上げた。

そんな母親の狼狽ぶりを態と無視するように、娘の口の中に汚れた指を突き入れ、舌を撫で回して溢れ出た唾液で母親の肛門で汚れた指を洗浄させた。

生ゴムの臭いと、母親の腸内異物の不快な臭いと味覚が緑子の口腔内に拡がり、思わず嘔吐しそうになった。

喉をが痙攣する様にヒクヒクと上下に動いたが、残忍な憲兵に見竦ませられる恐怖感で何とか押さえ込んだ。

緑子の唾液により手袋に付着した汚物が充分洗浄され、挿入しても処女の膣内を汚染する心配が無いと確認すると、中島の指は下の方に向かった。

大きく広げた股間を見回すと、ようやく黒い繁みも生えそろい、女として既に成熟しつつあることが分かった。

緑子の横に陣取った小島が、まだ固い桃の実のような左右の尻たぶに手を掛け大きく開いた時、恐怖と人に見せたことのない秘部をこじ開けられるという羞恥心でガクガクと腰を震わせていた。

柔らかい襞を開くと、ピンク色の花洞の入口周辺に半透明の薄い膜が付いているのを見付けた。

どうやらこの美しく成熟した貴族の娘の処女を頂く光栄に預かる事が出来そうだと思うと、心の底から喜びが込み上がって来た。

処女膜を破らないように、注意しながら指を内部に差し入れ、娘に悲鳴を上げさせながら、極上の処女の肉壁を散々楽しんだ。

最後に菊の蕾を破って内部に指を差し入れた時、娘が甲高い悲鳴を上げた。

やはり母親譲りの強い力で指を絞め付けてきて、ここも楽しめそうだと予想した。

緑子を解放して、次女の順子の取り調べに入った。

まだ完全に女として成熟していない体は、どこか儚げで力を入れると壊れてしまうのではないかと思うよう危うさがあった。

まだ生え揃わない飾り毛は童女の様な幼さを残し、当然処女膜を残す花洞は指一本入れるにもきつい狭間であった。

初めてそこに男の節くれた指を受け入れる痛さに鳴き声を上げるのも構わず、内部を存分に掻き回した後、上の方の穴の探索に回った。

強い括約筋の反射的抵抗を打ち破り、悲鳴を上げるのも構わず、内部に中指を突き立てた。

体が小さいため腸も狭いのか、入口の括約筋だけでなく腸全体が指を喰い絞めるのを感じた。

更に恐怖と緊張感が腸の蠕動を促すのか、中指全体をリズムカルに絞めつけるかのような動きを見せる少女の排泄器官に中島はホウと驚きの声を上げた。

身体検査を終えて、全裸のまま壁にそって並ぶ三人の女を見た。

冷酷な男達により全裸にされ、体中の穴をまさぐられた強烈なショックに顔を上げることも出来ず、俯いてすすり泣いていた。

中島は、このまま裸の女達を押し倒して、そのまま思いを遂げたい欲望に駆られた。

男の力を持てれば、このようにか細い女など思い道理に犯す事が出来るはずだー

しかし、そうすれば、この女達は、俺達の目的が、結局、自分達を犯す事だったと気付いて、持ち前の貴族としての気位を取り戻し、身は犯されながらも、心は俺達に屈する事はないだろうーそれでは、面白くない。

この女達を単に抱くだけでは無く、貴族としての高貴な体も自尊心も徹底的に破壊して、平伏させたいという暗い欲望に押さえられ、思い止まった。

中島は、女達の足下にくすんだ灰色の粗末な着物を投げ捨てた。

それは、これまで幾人もの女の血と汗と涙と体液を吸ってきた薄汚れた囚衣であった。

女達は自分達の足下に投げ出された薄汚れた衣類に薄気味悪い物を感じていたが、中島は女

達の感情を斟酌することなく着るように命じた。

勿論洗濯済みの囚衣であったが、染み着いた汚れは到底洗い落とせるものでは無く、それを着せられた夥しい女囚達の拷問に苦悶して流した脂汗と血と無念の涙を染み込んだ不気味な怨念のような気配が立ち昇っていた。

女達はその不気味な色に染みた、すえた臭いが立ち昇るような不潔な衣服に袖を通すことに暫くの間、躊躇いを感じていたが、裸の姿をこれ以上男達の眼に晒すのも耐え切れなくなったのか、恐る恐る囚衣に手を伸ばすと、まるで不潔な物が肌に直接触れることに怯えるように怖ず怖ずと身に纏い始めた。

貴族の女達の裸体を何時までも見ていたい気がしたが、これまで豪華な衣類しか身に付けたことの無い貴婦人に薄汚れた囚衣を着せるのも悪い思い付きでは無いと思った。

そして、この忌まわしい女の怨念を染み込ませたような囚衣に自ら袖を通す時が、雌奴隷への第一歩を踏み出す瞬間だーと、中島は感じていた。

尋問

中島達は、この広大な館の一室を尋問部屋に使用する事にした。その部屋はかつて使用人が寝泊まりしていた部屋のものであった。大勢居た使用人のために、この様な小部屋が廊下に沿って幾つも並んでいた。隣の部屋と薄い壁で仕切られただけの6畳程の板敷きの簡素な居室で、この貴族が起居する部分とは格段の差があった。

部屋には雨戸で閉じられた小さな窓が在るだけで、天井から吊された裸電球が唯一の明かりという、飾り気の無い部屋であった。

中島達はこの部屋に、憲兵隊で尋問の際に使用する、木の机と椅子と電気スタンドを運び込み尋問の準備を整えた。

中島は、最初にこの部屋に静江夫人を呼び入れた。

夫人は虜囚の怨念が染み着いたような、この気味の悪い囚衣を身に纏ったことにより、これまでの煌びやかな生活から断絶され、自分が本当の囚人に墜ちてしまった様な感慨に耽っていた。

小さな机を挟んで、直ぐ目の前に残酷な憲兵が座っている状況に夫人の恐怖心はいや増しに増加した。

自分の全裸を目撃し、それだけでは止まらず、夫にしか許した事の無い女の命の宿る場所や、これまで誰にも触られた事の無い恥ずかしい後ろの穴までまさぐった男が、息がかかる程近くに座っ

ている現実には羞恥と恐怖が渦巻き心が混乱した。

今にも自分に襲い掛かり、貞節を奪おうとするのではないかと恐れた。

しかし、意外な事に中島は、武器や自殺用の毒薬を体に隠し持っていないか、先ず最初に調べる
ことが規則となっており、大変失礼したと頭を下げ静かに詫びた。

そして貴様らがスパイ活動を働いた事実が無いかを確認するため、これから2、3質問すると落ち
着いた口調で言った。

その間、中島の冷酷な瞳は、油断無く夫人を見つめていた。

その中島の意外に落ち着き払った態度に、逆に夫人の心が激しく混乱した。

その時、薄い壁を隔てた隣の部屋から、大きな尋問の声と、鋭く空気を切る鞭の音と、鞭が肉体に
当たって弾ける音と、悲痛な悲鳴が聞こえて来た。

二人の憲兵が夫か執事を拷問していることが分かった。

先ほど女中頭が受けた残酷な拷問の場面がまざまざと目の前に蘇り、恐怖に襲われ押さえも効か
ず体が震え出した。

尋問は何月何日何処に居た？誰と会った？と云うような質問から始まった。

勿論、昔の事を突然聞かれても直ぐには思い出す事は出来ない。記憶を呼び戻せず、言いよど
んでいると、この恐ろしい憲兵は、突然形相を変えて、大声を出したり、机を叩いたり、電気スタン
ドの明かりを顔に向けたりして威嚇した。

直接体に触れたり、暴力を奮うことは無かったが、間を置かず質問に答えないと自分にも恐ろしい
暴力が加えられるのでは無いかという恐怖に駆られ、よく考える暇もなく、曖昧な返答を繰り返してし
まうのだった。

その間にも隣から聞こえてくる、恐ろしい鞭の音と悲鳴は、夫人の精神を掻き乱し、恐怖の混乱の
中でまともな答えが出来る状態では無かった。

冷静に考えることさえ出来れば、このような嫌疑が有り得ない事で在ることは容易に分かるはずで
あったが、突然の恐怖に晒された人間は、まっとうな思考能力を完全に喪失してしまうもので在る
ことを中島は良く理解していた。

尋問は2時間以上に及び、尋問が終わった時、夫人は呆然として立ち上がることも出来ないほど
憔悴していた。

夫人に替わり、娘が一人ずつ呼ばれて、夫人と同じような尋問を受けた。

この女達の尋問の間、小島と大島が、薄い壁一つ挟んだ隣部屋で哀れな犠牲者に、大声で尋問
の言葉を浴びせながら、鞭を振るい焼け火箸を押し当て、断末魔の悲鳴を上げさせ続けていた。

三人の女達は、厳しい尋問を受けている間に、恐怖で神経は混乱し、精神不安定となり、次第に夫人は夫や使用人を疑い、娘は母を疑い、妹は姉を疑うと云う、疑心暗鬼に駆られ始めていた。更には、自分たちが不注意であったため知らない間に敵国のスパイに利用されていたのではないかと自責の念を感じるようになって行った。

三人の女の尋問が終わった時は、深夜となっていた。

「本日の取り調べは、これで一旦終了するが、まだ疑いが晴れた分けではないので、明日また早朝から取り調べの続きを行う。」

と、中島が女達に宣告した。

女達が互いに会話出来ないよう、三人別々の離れた物置部屋に隔離した。

「小用を催したらこれを使え。」とブリキで出来た洗面器を女を押し込めた物置部屋に投げ入れると、扉を閉めて表から鍵を掛けた。

明かりの無い真っ暗な物置部屋の中から哀切な女のすすり泣きが聞こえていた。

「何時まで、こんな芝居がかった事を続けるのだ？早くあの女達を抱きたい。」

小島が中島に不平を垂らした。

「あの女達には守るべき秘密が無いから拷問の苦痛に耐えることは出来ない・・・」

中島が含み笑いをしながら静かに喋り始めた。

また、中島が訳の分からない事を話し始めたと二人は顔を見交わした。

「もし彼女奴が本当のスパイで、守るべき秘密を持っていたら、敵側にそれを知られてなるものかとい強い闘争心が働く。・・・そして、その闘争心は心の支えとなり、苦痛を和らげ、苦しい拷問にも耐える事が出来る事が在るものだ。しかし、彼女奴らには守るべき秘密が何も無いから、闘争心を起こしようがない。従って、突然自分の身に生じた惨めさも加わり、苦痛は何倍にも大きく感じることになる・・・」

中島の話に引き込まれてジッと耳を傾ける二人を見交わしながら、ゆっくりと落ち着いて話を接いだ。

「それと同じ事だ。もし今、我々が彼女奴らを犯せば、結局、我々の目的が彼女奴らの肉体を蹂躪する事だけだったのだと気付いて、彼女奴らは我々に対して強い敵愾心を持つようになるだろう。・・・そして、持ち前の並外れた貴族としての気位を蘇らせ、闘争心を燃え立たせ、例え、体は奪われても心で抵抗しようとするだろう。・・・それでは面白くない。・・・俺は貴族の地位も気位もすべて滅茶苦茶に打ち壊し、身も心も完全に征服したいのだ・・・」

冷酷な薄笑いを浮かべながら話を接いだ。

「抑圧を受ける者は抑圧する者に対して、迎合しようとするものだ・・・このままなら、彼女奴らは拷問の恐怖と苦痛に耐える事が出来ないから、自分だけでも助かりたい一心で、俺達の気に入るような嘘をつこうとするようになるだろう・・・それこそ俺たちの思う壺だ。

それは所詮自分が助かりたいだけの必死についたその場限りの嘘だから、当然三人の話は噛み合わず、更に俺達はその嘘を追求出来ることになる。・・・嘘は更に大きな嘘をつかざるを得ず、三人は互いに疑心暗鬼となり疑り合い、それに従って益々責めを受けることになる。」

小島と大島は真剣な表情となって中島の話に耳を傾け続けた。

「こうして、彼女奴らは逃れる事が出来ない永久の拷問連鎖の地獄の中に落ち込んでいくのだ・・・そして、最後は、自己暗示に掛かり本当に自分は悪事に荷担していたのでは無いかと信じ込むようになり、自分の犯した罪の意識に苛まれ、最後には、人間性を全て失い、唯の性器を持った骸^{むくろ}になり、俺達が股を開けと言ったら、言われるままにおとなしく開いてマ^黒を丸出しにし、チ^黒を咥えろと言ったら、従順に咥えるようになる・・・」

眼に冷徹な光を宿して、静かに説明する中島の残酷な計略に、大島も小島も思わずゾクッとするものを感じるのだった。

こうして昭和20年8月14日の朝は明けた。

陽がまだ低い夏の早朝の空気は、涼やかであったが、良く晴れた空は今日も暑い日になることを予感させた。

中島達は閉じ込めた女達を物置から表に出した。

娘達は一睡もせず、一晩中泣きはらしたのか、瞼は腫れぼったく、眼は赤く充血し、体は憔悴したようにぐったりとしていた。

娘達の物置に入れた洗面器には3分の1程の深さまで黄色い小水が溜まっているのを発見した。

尿意に耐えきれず、言われた通りに洗面器の中にしたのだろう。

男達は暗闇の中で洗面器を跨いで、用を足す若い娘の姿を想像した。

男達に繁々と自分の体から放出した不浄の液体を見詰められて、娘達が顔を赤く染めて顔を背けた。

中島は、また一つ貴族の娘としての矜持を破壊して、今ひとつ肉体奴隷への道が進んだ事を実感した。

母親の洗面器には使用した痕跡は無かった。

貴族のプライドが邪魔をして、洗面器などに用を足す事など出来ないと云う事かと思った。

「これから、朝食を済ませたら、昨晚の尋問の続きを行う」

中島が冷たい声で宣告した。

「ちょっと待って下さい・・・」

夫人が腰をもじもじさせながら声を出した。

「ほんのちょっとの間だけ、おトイレに行かせて下さい。」

「何便所だと！貴様なぜ俺達が差し入れた洗面器を使わなかった？」

と、小島が厳しく詰め寄った。

おろおろする夫人に中島が助け船を出した。

「まあ、仕方が無い、この辺にぶちまけられても困るしな。トイレに行かせてやれ。」

と、言う、その後、に接ぎ足した。

「スパイはトイレに入った隙に逃亡を図るものだ。規則ではトイレに入っている間も監視を付ける事になっている。大島、お前が見張りしろ。俺達は尋問の準備をする。」

夫人の腰を縄で縛り、その端を大島に持たせると、中島らは尋問の準備のために立ち去った。

大島は使用人の居室が両側に並んだ廊下の端にある、共同トイレに夫人を連れて行った。

薄い木の扉を開けると、狭い和式の便所となっており、粗末な陶器の便器が木の床に取り付けられていた。

こみ上げる尿意に負けて、夫人はこの狭い部屋の中に進み入ると、扉を閉めて欲しいと涙ながらに哀願したが、それは規則で駄目だと言ったろうと、大島から怒鳴り返された。

昨晚自分の全裸をこの男達に見られてはいるが、排尿する姿を間近に見られる羞恥は耐え難いものがあつた。開け放たれた狭い部屋の中でモジモジしていると、何をぐずぐずしている、時間が無いぞ、と後ろから怒鳴り付けられた。

尿意も限界に達し、哀願しても無駄な事を悟った伯爵夫人は、意を決して、この若い憲兵将校の見つめる前で、和式便器を跨ぎ、腰を下げた。

大島には背中を向ける格好になるので、上から見上げる大島には排尿の様子は見えないが、夫人が女囚用の囚衣の腰巻きを捲り上げた時、囚衣の裾から、滑べやかな白い量感のある双臀が露出するのが見えゴクリと唾を飲んだ。

「かつては何人もの使用人を顎で使っていた女主人が、今は粗末な使用人の共同便所で用を足している所を、昔の使用人に見せてやりたい物だな」と、大島が揶揄すると、

「ああー！おっしやらないで！」と、悲痛な声を上げた。

腰をぶるぶると何度も震わせた後、とうとう我慢の堰が切れて、五月雨の様な音を立てて、放尿を始めた。

この臍長けた貴婦人の排尿姿を直接見たいと云う、誘惑に負けて大島は体を折ると、床に顔を押し付けるようにして背後から見上げ、貴婦人の放尿姿を眼に焼き付けた。

形良く豊かに張った双臀の奥のほの暗い股間の最も深い所から一条の水流が迸り出て、便器の中に吸い込まれていく情景を、まばたきもせず間近から見続け、水流の発する香りを嗅ぎ続けた。

夫人は、若い男が背後で顔を床に押し付け、自分の排尿姿を斜め下から目撃していることに気付いて悲鳴を上げたが、一度始めた放水は途中で止める事は出来なかった・・・

「食事を終えたら、尋問を始める。さっさと喰え！」と、中島が命じた。

三人の女の前には、軍隊の糧食が置かれていた。

「貴様らに取っては粗末な物かも知れんが、戦地の兵隊さんはこんな物を喰って、必死で戦っているんだ！貴様らのような非国民には不味くて口に出来ないと言うのか！」

軍刀で床を叩いて威嚇され、女達は、味気の無い乾パンや干し肉を口に入れると、水と共に無理やり胃の中に流し入れた。

「金田伯爵や執事と女中頭は、スパイの容疑が明白になったので、昨晚の内に憲兵隊本部に移送した。」と、中島が食事中の女達に知らせた。

本当は、この女達を恐怖と錯乱に陥れる目的で、深夜まで鞭で打ったり、焼け火箸を押し付けるなどの拷問を繰り返し、悲鳴を上げる役割を続けさせたため、息も絶え絶えになってしまったので、屋外の倉庫に放り込んだのであるが。

尋問は昨晚と同じ場所で、夫人から始められた。

中島の前に引き出された夫人を見て、一夜にして、すっかり薄汚れた、そして、これまで幾人もの女の無念の涙を啜って来た囚衣が似合う女になったものだと感じた。

小さな窓から差し込む朝日を横から受ける夫人の顔は、僅か一晚ですっかりやつれて果て、最早貴族としての気位は見られず、憲兵隊本部で常日頃の取り調べに引き出される容疑者と変わるところは無かった。

中島は、人間とは本来弱い動物だと信じていた。

人間が衣類を身に纏うのは、単に裸の身体を隠すだけが目的では無く、人間としての弱さを外部に対して押し隠す、鎧のような役目を衣類は持っていると考えていた。

人間は、相対する人のその内面に威厳を感じ、尊崇するのでは無く、その人の着る物や外見に威厳を感じ尊崇するものだ。

高価で豪華な衣類に身を纏っていれば、その着ている物の威厳に守られて自信となり、貴族としての気位を維持できるが、粗末な囚衣では人間として持つ弱さを守る事は到底出来ず、逆に心理面からも囚人と化してしまうことを知っていた。

そして、目の前に佇むこの貴婦人には、昨晚の食堂で中島達を完全に無視した尊大さは、最早陰を潜め、今やすっかりと囚衣が身に付いた女に成り果てたと感じていた。

夫人の目の前の机の上に調書の束をポンと置いた。

「これは、お前の署名だな。」

中島が調書の最後に記された夫人の署名を示し、不安そうにおどおどする夫人の目を見つめながら確認を求めた。

昨晚取り調べを終える際に、中島から署名するように言われて、朦朧とする中で調書に署名した事を夫人は思い出した。

「そして、これがお前の長女の調書で、これが次女の調書だ。」

と、二人の署名がされた調書を机の上に投げ出した。

「そして、これを読むと三人の供述に明らかな食い違いがある。本日はその点について取り調べる。」

と、言い放つと尋問を開始した。

勿論、恐怖による精神的動揺の中で、冷静に考える暇も与えられず強制されるまま、曖昧な記憶に基づいて答えたものであった。

自分でも昨晚何を聞かれ、どう答えたか覚えていない状態で作成された調書に基づいて追求されても答えようが無い。中島の繰り出す鋭い質問に益々曖昧な返答を繰り返して行くしかなかった。

そして時々、中島が助け船のように出す、「ここはこう云う事では無かったのか？」と、云うような誘導尋問に縋るように、「ええ、そうでした・・・」と、つられて答えてしまうのだった。

こうして中島は、女達の恐怖と混乱と互いの猜疑心につけ込み、この女達が重要情報の機密漏洩に関わり、敵国のスパイに情報を渡したと云う架空の筋書きに女達が気付かない内に徐々に誘導して行った。

調書を作成しながら、自分が繰り出す蜘蛛の糸に美しい蝶のような佳人が益々絡め取られて行く事を感じて、心の中でほくそ笑んだ。

昼頃まで掛かって、三人の尋問を終えた中島達は女達を一所に集めた。

「これまで、貴様らを取り調べて、貴様らが某重要機密の漏洩事件に連座している疑いが明白である事が分かった！そして、更に、この事件の核心となる、何か重大な事実を隠そうとしていると考えられる。今までは、こちらも温和しく重要参考人として尋問していたが、これからは敵国への内通容疑者として厳しく取り調べを行う！」と宣告した。

これを聞かされた女達が、中島の言わんとしていることは、これから自分達を拷問に掛けて自供を強いる事だと理解し、恐怖に駆られ、ヒステリックな悲鳴を上げて泣き叫んだ。

「こら！何処に逃げようとするのだ？」

恐怖の余り、その場から逃げだそうとする女達の体をつしりと掴むと、女達の悲痛な叫びに構わず、中島達は三人を抵抗出来ないように麻縄で縛り上げていった。

囚衣の上からひしひしと縄掛けされていく、すすり泣きし、うな垂れる女達を見つめて、益々本物の女囚の様になって来たと中島は思った。

美しい貴族の貴婦人が、薄汚れた囚衣の上から女囚縛りに縛られ、薄い布越しに豊かな胸の隆起と腰のくびれが強調された姿は、哀切感を帯びた妖艶さを醸し出していた。

「この女達が本物の性の奴隷に改造されるのも、後わずかだ・・・」

と、心の中で呟いた。

拷問開始

中島達が拷問の場所を選んだのは最初の食堂であった。食堂テーブルを隅に追いやると、広い空間が出来た。

天井のシャンデリアを外して、滑車を取り付けると、高さも丁度良く、流石に重いシャンデリアに耐えた天井なので人間を吊してもビクともしない強度を持つ事を確認した。

中島らは上半身をヒシヒシと縄掛けされた三人の女囚を拷問の準備が整った食堂に連行した。

女達は一日にして打って変わった食堂内の景色にぞっとし、足をぶるぶる震わせた。

そこには、かつての華やかな雰囲気は消失し、何やら恐ろしげな拷問道具が所狭しと並べられていた。

「お許し下さい！何でも喋ります！」と、夫人がヒステリックな悲鳴を上げて哀願した。

「それなら、7月4日午後1時に何処に出かけて、誰に会った？」

中島の怒声を含んだ質問を受けて、夫人は、恐怖に錯乱する意識の中で必死に記憶をたぐり寄せ答えようとした。

「まだ、そんな白々しい嘘をつくのか！」と、中島は夫人の頬を激しく平手打ちすると一喝し、
「この上は、少し痛い眼を見ないと白状しないらしいな」と、吐き捨てるように言った。

食堂に三台の三角木馬が並べられた。その鋭角に鋭く尖った背に、三人の女が乗せられていた。腰巻きを捲り上げられて、女の急所に直接接する木馬の背に秘裂を裂かれる激痛に女達は悲鳴を上げた。

「お母様、早く本当の事を言って！ 私たちを助けて！」娘が苦しそうに悲鳴を上げた。

「私も本当に知らないのよ！」母親も涙を流しながら苦しそうに叫んだ。

「エーイ！ 強情な奴だ！ まだ白状しないのか！」と、小島が木馬の上に載せられた、剥き出しの夫人の豊かな双臀に竹刀を振るった。

柔肉を弾く竹刀の音が食堂内に響いた。

竹刀を受ける度に豊かな臀肉はブルッと震え、その動きが牝芯を突き刺す木馬の背と擦れ合うことになり、鋭い痛みが下半身を貫き、耐え難い苦痛に全身に油汗を浮かべて悲鳴を上げた。

「叩いても駄目なら、こんなのはどうだ？」と、小島と大島が両側に立ち夫人の足首を掴むと、呼吸を合わせて思い切り足首を下に引き下ろした。

自分の体重に更に男の力が加わって秘裂に懸かり、夫人は体をピンと硬直させ、ギエッと鳥が鳴くような悲鳴を上げた。

股間は大きく木馬の背に食い込み、正面から見つめる中島の目には、股間のほの暗い黒い飾り毛の中に鋭角の稜線が埋没しているように見えた。

数回、大島と小島で夫人の両脚を掴んで秘部を木馬の背に押し付け、けたたましい悲鳴を上げさせた。

股間から突き上げる苦痛に、夫人の顔は苦悶に歪み、ハアハアと荒い息を吐き、冷や汗を流し続けていた。しばらく間を置いて、男達から加えられた激痛から回復した頃を見計らって、中島が天井の滑車に繋がれ夫人の上半身を支えていたロープを引き上げた。

上半身を女囚縛りにされていた夫人の体が木馬の背から5センチばかり浮き上がり、乳房の左右と下を通り三角形に縛り上げた縄が、薄い囚衣の上から夫人の乳房を絞り上げた。

宙に吊り上げられ、胸で体重を受ける苦しさを十分味あわせた後、中島はロープを引いていた手

を離した。夫人はそのまま真っ直ぐ、鋭く尖った木馬の背の上に開いた股間を落下させた。

夫人は股間から脳天を突き上げるような激痛に、断末魔の悲鳴を上げると、全身を振るわせて悲痛な声を上げて泣き叫んだ。

「可哀想なお母様、誰かお母様を助けてあげて！」と、妹の順子が悲痛な叫び声を上げた。

順子にしても長時間木馬の背に攻められ続ける内に、当初の鋭い痛みは何時か通り過ぎ、今は股間からジンジンするような疼きだけを残して痛感が消失し、下半身は痺れきり、氷のような冷たさを感じていた。

大島は生意気なことを言う小娘に思い知らせるかの様に、順子の尻を竹刀で何度も叩き付けて、悲鳴を上げさせた。

突然空気の抜けるような声を出して、姉の緑子が体を前後にガクガクと揺ると、そのまま屈折れるようにガクンと前のめりになった。

天井からのロープにより木馬からの転落は免れたが、木馬に跨がったまま、意識を失ってしまった。

そして、木馬に接する股間からは大量の小水が溢れ出し、木馬の胴を伝って床を濡らした。

姉の失神と失禁を以て、女達は一旦木馬から下ろされた。

中島としては、娘達の処女の証である膜が、木馬により破られるのでは無いかと心配し、適当な頃合いを見て下ろす気でいたので、丁度良いタイミングだったと思った。

傷の手当てをすると称して、女達の腫れ上がった股間に軟膏を塗布した時、まだ姉妹の薄い肉の膜が健在で在った事を確認して、少しほっとした。

少しの休憩を置いて、次の責めに入った。

女達は女囚縛りの上半身を天井からのロープに繋がれ立位にされていた。

そして、足下には水で満たされたバケツが幾つも並べられていた。

黙々と拷問の準備を続ける男達に、恐ろしい雰囲気を感じ、体の震えを押さえることが出来なかった。

準備が整うと、次に男達は麻縄で女の髪の毛を束ねて縛り、縄尻を下に思い切り引き絞った。髪を強引に引かれる痛みに悲鳴を上げたが、男達は構わず、顔が天井を見上げるまで引くと縄尻を天井から吊り下げたロープに固定した。

そして、男達は無理矢理、女達の口に漏斗をねじ込もうとした。女達は体を揺すって、拒絶したが、

強引に太い漏斗の柄を口中に突き立てられてしまった。

そして口中に突き立てた漏斗が外れないよう、漏斗の根本を麻縄で巻いて、まるで猿轡をするように、女達の顔に縛り付けた。

しっかりと頭部を緊縛され、顔を動かす事が出来ないため、恐怖の色を浮かべながら、横目でじつと男達の行動を見つめた。

男達は無言で大きな柄杓で水をすくうと口にねじ込んだ漏斗に流し込み始めた。

漏斗一杯の水が一気に口腔に流れ落ちて来た。

水を飲み込むまいと喉に力を入れるが、そのような努力を無視するかのよう、水は喉を通過し、胃に吸い込まれていった。

無理矢理、水が喉の奥を落下する際のあまりの苦しさにゴフォ、ゴフォと咳き込んだ。

「どうだ、苦しいか？素直に吐く気になったら、尻を『の』の字に振って見ろ。」と、貴族の貴婦人なら恥ずかしくて出来ないであろう腰の動きと知りつつ中島が卑猥な笑いを浮かべて、柄杓で次の水を流し込みながら叫んだ。

女達には拒絶する間も与えられず、次々と水を体内に流し込まれていった。

水が気道に流れ込み絶息する苦しさ、注入された大量の水が胃袋を押し広げようとする苦しさに女達は喘いだ。

あまりの苦しさに耐えかねて、羞恥も忘れて男達の前で大きく尻を振り、「白状します」と、ゲボゲボ口から水をはき出しながら、思い付く限りのことを叫んだが、勿論男達の満足を得られる自白など出来る筈も無く、逆に益々男達を勢い衝かせ仮借無い水責めは続いた。

絶え間ない責め苦で朦朧とする意識の中で、このまま立ったまま溺れ死んでしまうのではないかと女達は感じ始めていた。

30 分程掛けて、バケツ一杯の水を消費し、更にもう一つのバケツも三分の二が無くなろうとしていた。

女達の足下に転がった、空のバケツを見ながら、中島が小休止を命じた。

女達の口から漏斗が取り外されが、体内を襲う水圧から来る苦痛に、意識も朦朧となり息も絶え絶えの状態で在った。

「どうだ、素直に喋る気になったか？」

夫人の黒髪を束ねて縛っている麻縄を掴むと、強く引っ張りながら尋ねた。

朦朧としていた夫人の意識が少し蘇ったのか、薄く開けた瞼から焦点の定まらぬ眼中で中島をぼんやり見つめた。

大量に体内に注入された水を少しでも汗として体外に放出しようとする生体機能が働くのか、全身はビッシヨリと汗に塗れ、更に口から溢れた水や、漏斗に注ぎ込む際に溢れた水も加わり、水を吸った薄い囚衣が女体にピッタリと張り付き、夫人の良く張った美しい胸の形やその先端の尖った乳首が囚衣の上に浮き出し、更に腹回りや股間や太股の周辺の形状やほの黒い股間の繁みの部分も囚衣の外に浮き出ている。

最早、囚衣は体を覆い隠す役割を完全に喪失し、それが包む嫋やかな体型をそのまま露出していた。

中島は女達の異様に膨張した下腹周りを見つめながら、ほくそ笑んだ。

女達の髪を引いていた麻縄が緩められたので、女達はようやく顔を正面に向けることが出来た。

苦しい姿勢から解放されてほっとしたのも束の間、男達は漏斗を咥えていた口に、今度は両端に紐を結んだ短い竹製の猿ぐつわを噛ませ、頭の後ろできつく紐を結んだ。女達は、悲鳴にならない悲鳴を上げて、強く口に食い込んだ竹を奥歯で噛みしめて苦痛に耐えた。

次に男達は長さ1.2メートル程の青竹を女達の足下に置いた。

何をするつもりかと、訝っていた女の足首を掴むと強引に竹竿の端に縄で括り始めた。

女達の抗議も猿ぐつわに掻き消され、両足を思い切り開く形で竹竿に固定されてしまった。

女達は男達の好奇な視線の前で、天井から吊り下げられた縄に固定され、足は左右に大きく広げさせられ人の字型に立位で固定されてしまっていた。

囚衣は既に裸身を隠す役割を失ったように、ぴったりと肌に張り付き、その優美な体の線をさらけ出していた。

男達は薄笑いを浮かべながら、遠慮無く、その美しい体の線を、好色な目でじろじろ眺め回していた。

「良い格好にして貰ったじゃないか？」

と、中島が満足そうな顔をして足を大きく広げた女達を見つめた。

そして、「こんな濡れた服を着ていたら風邪を引く」と、大島と小島に囚衣を脱がすように命じた。

女囚縛りの麻縄を天井の滑車のロープから外すと、支えを失った女達はへなへなと尻餅を付くように、疲労しきった体で床に座り込んだ。

疲労感と絶え間なく体内から襲う苦痛によりほとんど身動き出来ない無抵抗の女から、厳しく縛り上げていた麻縄を一旦解くと、有無を言わず濡れた囚衣を剥ぎ取った。

度重なる拷問にすっかり憔悴していた女達は強い抵抗を示す事も無く、易々と男達に囚衣を奪い取られてしまった。

明るい光の中で再び男達の目に乳房を晒すことになった羞恥から、一瞬自由になった手で両乳房を隠そうとしたが、男達はそんな女達の気持ちを無視するかのように、強引に女の両手を掴むと、ほとんど抗うことのない女達を再び麻縄で両手首を一つに縛り上げた。

そして、天井の滑車から垂れるロープにこの両手首を縛った麻縄を結び付け終わると、ロープを引き上げ始めた。女達は両腕を頭の上に引き上げられ、そのまま船の帆が上がるようにしゃがみ込んでいた上体が持ち上げられていった。

手首に掛かる体重に、喘ぎ声を上げたが、男達は無視して、とうとう完全に立ち上がらせてしまった。

両手を頭の上に引き絞られ、青竹に固定されて両足は、大きく左右に広げられ、正面から見ると再び人の字の形に固定されてしまった。

乳房や腹周りが、剥き出しとなり、透き通るような白い滑やかな肌が水に濡れてキラキラと輝いていた。

昨晚はシャンデリアの蠟燭の明かりの下で見つめた裸体であったが、こうして明るい陽の光の下で見ると、その美しい裸身がより明瞭に見え、肌の白さとしっとりとした肌理の細かさは男達を魅了した。

「下もぐっしり濡れているな・・・」

と、男達は腰巻きの濡れ具合を手で触れて確認すると、腰巻きの紐に手を掛けて、ゆっくり解き始めた。

一度は、見られたことのある全裸姿ではあるが、このように手足を麻縄で固定され身動きのつかない状態で、再び、男達の眼に晒す羞恥に耐えられず女達は体を揺すって拒絶しようとしたが、所詮は儚い抵抗でしかなかった。

男達は易々と腰巻きを取り去ると、正面に回って遮る物の無い、女達の裸体をしげしげと鑑賞した。

全裸に剥き上げ、大きく人の字に固定された女達を見ながら、

「生憎、囚衣は一枚しかないから乾くまで、暫くの間、裸でいて貰うしかないな」

と、言い、大声で笑い合った。

この前、囚衣を着せられた時が、貴族としての身分を剥奪されて、女囚の身分に叩き落とされた時だとすれば、いま又、その囚衣すら奪い取られた時が、女囚の身分から雌奴隷に叩き落とされた瞬間だーと、三人の女の全裸姿を舌なめずりするように眺めながら、中島が心の中で呟いた。

母親を中心に左右に娘を立たせ、窓から差し込む明るい夏の光の中で、上気した肌の流れるような体の線や母親の豊満な、あるいは娘達の愛らしい乳房を、そして明瞭に見える濃密に繁茂した、あるいは疎らな飾り毛の一本一本まで、残忍な憲兵たちは、ネツトリとした眼で嘗めるように観察した。

暫く鑑賞を続ける間に、繋がれた女達が、最初は小さく、やがて次第に大きく腰を揺すり始めたのに気付いた。

そして、男達は、そろそろ始まるなとニヤリと笑を浮かべた。

男達はそれぞれの女の傍に近寄り、

「一体どうしたんだ？」と、大きく迫り出した下腹を優しく撫でながら聞いた。

「深窓に育った、貴族のお姫様が、下賤な庶民の前で、立ち小便するところを見せて下さると言うのかい？」

と、片頬を卑猥に歪めて苦痛を溜めた女の目を見つめながら嫌らしく尋ねた。

両手を使い下腹や、時には陰毛の上を撫で回しながら、突然下腹をグイッと押してくる男達の所作にウツと呻き声を上げながら、自分たちは男達が指摘する通りの、のっぴき成らない状況に追い詰められている事を理解した。

男達に無理矢理流し込まれた水は、今は膀胱に集まり、膀胱を内部からパンパンに膨張させ今にも破裂寸前のように感じさせた。

忍耐の限度を超える水圧は、激しい痛みとなってズキンズキンと脳裡に響いていた。

今女達に最後の瞬間を思い止まらせていたのは、全裸で大きく両足を上げた恰好で、明るい陽の中で男達に正面から排尿の姿を見られたく無いと云う羞恥心だけであった。

「どうした？オシッコがしたいんだろう？早く体の中に溜まった物を流し出して、スッキリしたところで貴様らが隠している秘密も白状してくれると嬉しいのだが・・・」

益々激しくなった腰の動きを楽しそうに眺めながら男達は女の股間をまさぐった。

中島がポケットから上質の和紙で作ったコヨリを取り出すと、二人に渡した。

それから、中島は、大きく開いた夫人の股間を前にどっかりと腰を下ろした。

そして、前に投げ出した脚で青竹を上から押さえ付け、夫人の下半身の動きを封じた。

少し前屈みに上体を折ると、夫人の開け放たれたほの暗い股間が眼前にあった。

夫人は蛇のように陰湿な目で自分の秘部をじっと見つめる、不気味な男に恐怖したが、

それより下腹から突き上げる激しい苦痛の方が今は耐え難いものがあった。

中島は隠微な目で暫くの間、苦しそうに蠢く夫人の秘部を注視していたが、無言で両手を夫人の股の付け根に伸ばした。

そして、夫人の濃密な飾り毛の下の豊かに肥大した柔らかい陰唇を大きく開き、赤く充血した秘所の襞を掻き分けた。

慣れた手付きで、まるで魚をおろすように次々と左右の柔らかい襞を寛げると、その秘奥の最奥に柔らかな肉孔が露出した。

年の割に、色素の沈着も無く綺麗な花園だと思った。

娘を二人も産んでいるのに全体は綺麗なピンク色をしていた。

子供を産んだ後、余り性交渉をしていなかったのではないだろうかと思つた中島は思った。

それなら、若い女と同じような締まりの良さを取り戻しているのでは無いだろうか―と、中島はこの後自分達が蹂躪することになる華洞をじっと見つめて、舌なめずりをするのであった。

卑猥な視線に晒される肉洞の僅か上に、体内から攻め上げる凶暴な圧力にびくびく蠢く開孔を見つけた。

同じ排泄器官の開孔部に過ぎないが、男と女では随分形が違う物だと思いながら、中島は女陰の上にある小さな開孔にコヨリの先をそっと触れさせた。

外形的構造は違っている、男も女もその開孔部分が繊細な神経をちりばめた箇所であることに代わりは無い。

親指と人差し指で、秘孔をこじ開けられ、その内部の鮮やかな桜色をした、薄い粘膜の層を柔らかい和紙の繊維で優しく撫でられた時、むず痒さを伴ったような言いようの無い刺激が夫人の脳裏を襲った。

その形容しがたい刺激は、開放を渴望する尿路の動きを加速し、夫人の最後の儚い努力をあざ笑うかのように女体を責め立てた。

内部からの激しい圧力を受け続けている水門の出口部分を柔らかな紙の繊維で刺激され、次第に限界へと追い詰められつつある夫人であった。

女達は冷や汗にまみれ、眉間に皺を寄せ、頭を振り乱し、体を振ってこの体内から巻き上がる激しい苦痛に耐え、崩壊の時間を少しでも延ばそうとした。

隣では、小島が中島を真似て、コヨリの先で順子を責め立てていた。

まだ飾り毛もまばらにしか生え揃わず、童女のような印象を与える新鮮な肉貝を押し広げ、この好色な中年男は、自分のこれまでの女体責めの経験を駆使して、親子程も年の違う少女を責め立て、悲鳴を上げさせ、苦悶に体をのたうたせていた。

未成熟の果実のように、まだ硬そうな秘孔の上に開孔した排尿器の先端を攻めるコヨリの先の柔らかい刺激に耐えられず、まるで先走りの様に僅かずつ黄色い液を滲ませ、花園をグッシヨリ濡らしていたが、若い強力な括約筋は最後の崩壊を押し止めていた。

その頃、大島は長女の緑子の小水の出口をコヨリを使って責め続けていた。

緑子の前にどっかと腰を下ろした大島は両膝で、青竹を踏みつけて女の足の動きを封印して、股の間を正面から見上げるような姿勢で緑子に対峙していた。

大島の眼前には、漸く生え揃った薄い若草の下の若い秘裂が、大きく股を拡げており、この陰湿な若い憲兵将校の眼前に隠しようも無く露出していた。

しっとりとした湿気を帯びた女の花洞とその直ぐ上に開孔する排泄孔が、ネツトリとした若い女の香りを立ち登らせながら、まるで海洋性の軟体動物の動作にも似た、苦痛に喘ぎヒクヒク動く蠱惑的な様子に、大島の目が釘付けになった。

最初、大島は敏感な出口周囲全体をコヨリを使って擦りながら、女の反応を楽しんでいたが、次第に排泄孔そのものの中心に向かって攻撃を加えるようになって行った。

生理的苦痛による痙攣で孔が周期的に、きつく閉じたり弛緩したりを繰り返していた。

そして、緩んだ隙に細く振ったコヨリを内部に差し込むことに成功した。

その瞬間、緑子はウツと呻き声を上げて、苦しそうに顔をしかめた。

尿道口に突き立てられた棒のようにコヨリは、ピンと前に向かって突き立ち、手を離しても落ちることとはなかった。

ヒクヒクと揺れ動くコヨリの先端が、追い詰められた緑子の懊悩を現すかのようであった。

大島は、尿道口に固く咥え込まれたコヨリを優しく引いたり押したりして尿道内部を刺激した。

緑子は苦悩の中で、大島の行為を批難するように、不自由な腰を振り、苦しそうに声にならない呻き声を上げた。

そして、花の蕾が大きく膨らむように、突然、大島の眼前の尿道孔周りが丸く大きく膨らんだ。

次の瞬間、弾けた蕾から噴き出した熱い奔流が大島の顔面を襲った。

逃げ遅れて、真正面から女の小水を顔面に受ける大島を見て、中島と小島が腹を抱えて笑い出し、大声で揶揄した。

ペツ、ペツと口の中に浸入した、緑子の小水を吐き出しながら、顔面をびしょ濡れにした、不機嫌そうな表情の大島が二人の近くに返って来た。

三人は事前に誰が一番遠くまで飛ばすか、賭けていたのだった。

中島は次女の順子に、小島は静江夫人に、そして大島は長女の緑子にそれぞれ賭けていた。

緑子の崩壊を皮切りとして、他の二人も最早耐える事が出来ず、激しい放水を始めた。

三人で女達の噴出具合を見届け、賭の結果を公正に判断するため、男達は色々論評しながら、並んで女達の排尿状況を見守った。

緑子の膀胱を爆発寸前にまで押し広げていた大量の尿は、一斉に細いトンネルに集中したため、凄まじい水圧は尿管を内部から極限まで押し広げ、キリキリと苦痛を与え、排尿しながら悲鳴を上げた。

開ききった管の表面を引っ掻き、叩くような、激しい水流による摩擦感が放水を続ける緑子を苦しませ続けた。

表から見ると、尿道口を思い切り押し広げた、まるで滝のような太い水流が音を立てて、放物線を描きながら流れ落ちていた。

静江夫人は、男達の見守る中で、立位で排尿する姿を目撃される事を恥じるように、必死に股間の筋肉を励まし、チョロチョロと断続的な細い水流を作り出し、両足の間にビチャビチャと水溜まりを作っていた。

しかし、そのために膀胱の圧力は何時まで経っても下がらず、その間も股間の緊張を強い、一番長い間苦痛を持続させることになった。

眉根に深い皺を寄せて、苦悶の表情を浮かべながら、腰をブルブルと振り立て何時までも排尿を続ける夫人に男達の視線が集まった。

成長途上の順子が一番尿管が細いためか、細い管に集中した強い圧力は、細く強い水流となって前方に向けて放射した。

順子の若くて強い尿道の括約筋は体内からの強い圧力に均衡するように尿管を絞り、まるで水道に接続した水撒きホースの先を指で絞った時の細くて強い水流のような激しい放出に、男達の眼は釘付けとなった。

小さな出口に向かおうとする、尿の強い圧力に順子は排尿しながら悲鳴を上げた。

苦痛で下半身を前後に大きく振り立てたため、股間からほとんど垂直に迸り出た小水は 2 メートル近い弧を描いて、磨き上げられた大理石の床を激しく叩いた。

この賭は俺の勝ちだなと、ニヤッと微笑むと中島は小島や大島を見回しながら言った。

やがて、大半の尿を放出し終え、苦痛の低減により緊張を解いた女達は、自意識を取り戻し、大声を上げて泣きじゃくり始めた。

「貴族のご令室やご令嬢が、男の目の前で、堂々と立ち小便を披露してくれるとは、随分恥知らず

なもんだな！このような恥知らずだから、大事な国家の機密も外国のスパイに売り渡すような恥知らずのことが出来るのだろう！」

小便を顔に浴びせられた上、賭けにも負けた大島が忌ま忌ましげに、泣き叫ぶ女達を嘲った。女達を吊り上げていた滑車から下ろされ、両足を大きく広げていた青竹も外されたが、女達は足を閉じて恥ずかしい部分を隠す気力の起きない程、疲弊していた。縄を解かれた後とも、放心したように力無く床の上にぐったりと横たわったままであった。

男達は、新たに麻縄の束を持ち出すと、抵抗する気力も喪失した無抵抗な女達に縄を掛け始めた。

首に掛けて下に引いた縄に幾つも結び目を作り、二つに振り分けた縄を背中に回して絡げた後、胸から腹にかけて幾つもの菱形を作るように縛り上げた。

いわゆる菱縄とか亀甲縛りと呼ばれる縛り方は、憲兵隊で常用する縛り方では無いが、女体が最も映える縛り方だと、縛りながら男達は思った。

胸の前で菱形に交差した縄は、夫人の豊満な胸を、まるで男を誘惑するかのように大きく突き出すように絞り上げていた。

ようやく成長した長女の胸も縄により強調され、男の目を妖しく引きつけた。

成長途中の次女も可憐な乳房を胸の谷間から絞り上げるにより蠱惑的な色香を出していた。

女達がぐったりとしたままで、ほとんど抵抗がなかったので美しい縛りを完成する事が出来た。

男達は太く絞った別の麻縄を手にとると、下腹の周りで一卷きさせて結んだ縄を下に引き下ろし股間を通して、まるで縄で褌を掛けるように縛り上げ背中で縄止めした。

左右の陰唇に隠れるようにしっかりと縄が秘裂を割り込んでいることを確認して、男達は満足そうに笑みを浮かべた。

中島はちゃっかりと、静江夫人の秘裂に食い込むようにぐる縄に大きな結び目を二つ作っておいた。こうしておけば、体を身悶えさせた時に、二つの穴に同時に刺激を与えるはずだ。

細かく毛羽立った荒くれた太い縄で作った瘤が狙った通り、女体の秘奥に埋め込まれている事を確認した。

瘤に指を当ててそっと揺らした時、思わず夫人が猿轡の奥でウツと声を上げて眉を顰める様子を卑猥な笑みを浮かべた。

高手小手に両手を縛り上げ上半身の動きを完全に封印した女体に、最後に太股から足首まで俵を縛るように両足を縛り上げて全身の動きを封じた。

暫くの間、男達は猿轡を掛けられたまま、全身を厳しく縄掛けされた全裸の美女達をしげしげと眺め続けた。

女達は、ようやく強いショックから蘇りつつあった。

そして男達が卑猥な笑みを浮かべて、全裸で床に横たわる自分たちを見下ろしていることに気づいた。

全身を厳しく縛められているため、恥ずかしい所を隠そうにも体を動かす事は出来ず、僅かでも体を振ると、股間に食い込んだ縄から意地悪い刺激を与えられる事を思い知らされた。

羞恥と苦痛を男達に訴えようとしたが、口にきつく食い込んだ猿轡が声を奪った。

中島は秘裂を割る縄と女芯に埋没した瘤が厭らしい効果を発揮始めたことを認識すると目配せした。

「びしょ濡れになって寒かったろう？少し体を温めて上げよう・・・」

と、火の点された数本の蠟燭を両手にすると、身動きが出来ず、床に横たわる女達に近づいた。

日が傾き始め、急に薄暗くなり始めた室内を蠟燭の灯りがボウッと照らした。

蠟燭に照らされた女の顔が不安に歪んだ。

突然、夫人の隣に横たわっていた長女が、大島から柔らかい腹の上に蠟を垂らされて悲鳴を上げた。

中島も蠟燭の炎が大きく育ち、溶けた蠟がたつぷりと蠟燭の先に溜まった事を確認してから、夫人の豊かな胸の上に蠟涙を垂らした。

絹を練ったような柔肌の上に落下した蠟は、滑やかな肌の上にさっと広がり、固形化して肌に張り付いた。あまりの熱さに悲鳴を発して、全身を芋虫のように固く縛られた体を振ったが、その瞬間股間を絞め上げる縄と瘤が夫人の敏感な箇所になんか刺激を与えた。

最初の一滴に続いて、男達は嵩に懸ったように絶え間なく蠟涙を柔肌に浴びせ始めた。

体を動かせば、股間の縄により女芯を責められる事を認識して、じっと静止を保とうとするが、熱蠟が皮膚に触れる刺激は、反射的に体を振らせ、蠟燭の灼熱と股間から突き上げる刺激が女達を責め苛んだ。

「よくも、男子の面体に小便を引っかけてくれたな！この不届き女にはこうしてくれる！」

余程、小便を浴びせられたことに腹が立ったのか、大島は両手に三本ずつの蠟燭を握り締めると、緑子の白い肌の上に熱蠟の雨を絶え間なく浴びせ続けた。

熱蠟の間断無い苦痛に、身動き出来ない体を痙攣させたが、その動きは股間を潜る麻縄に連動し、蠢立った麻の繊維が敏感な神経の集中する割れ目を摩擦した。

順子も体を動かさないようじっと耐えていたが、意地の悪い小島から、神経の集中した臍の穴に大量の熱蠟を注ぎ込まれて、大きな悲鳴を上げて体を振った。

女達は胸から腹から太股に蠟の雨を浴び続けた。

体の正面がほとんど蠟で埋め尽くされた女を足先で、裏返しにひっくり返すと、更に背中や臀に、そして敏感な足の裏にも蠟を垂らし続けた。

絶え間ない灼熱と股間を突き上げる疼きに、女達は猿轡を噛みしめて、泣き叫び続けるしか無かった。

やがて、蠟を消費し尽くし残り真近くなった蠟燭を女の体に押し付けて消すと、この蠟燭責めは終わりを告げた。

熱蠟の苦痛の余韻で、ハアハアと荒い息をつく女達を、男達は残酷な眼でじっと眺めた。

今や両乳房も臍の周りにも固い蠟の山が築かれ、乳首は蠟の中に完全に埋没していた。全身を隈無く蠟に覆われた女達がようやく平静を取り戻し始めた頃、男達は先が9本に分かれた皮の鞭を手にしていた。

良くスナップを効かせて高々と振り上げた鞭が、女体に炸裂した時、皮膚の表面を覆っていた蠟はひび割れ、粉々に破壊されて飛び散った。

蠟の灼熱に取って代わった、鞭の激しい打撃が女達に新たな苦痛を与えた。

女達に悲鳴を上げ続けさせ、残酷な鞭の穂先により、体に纏っていた蠟をほとんど弾き飛ばした。

実際に鞭に打たれていた時間は短い物であったが、女達には永遠に続く苦痛のように思われた。

油汗に塗れ、全身に鞭の打撃跡を赤く染め、ジンジンとする疼痛に再び荒い息をついていた。

こうして、女体に張り付いた蠟をほとんど剥ぎ取り終わると、女達の両足を一つに縛っていた縄を解き、両足を自由にさせた。

長い間、口に噛ませていた猿轡を取り外したので、女達は深く息が出来るようになり、少し落ち着きを取り戻した。

足の縛めを解きながら、中島は夫人の股間を襲っていた瘤と周辺の縄にそっと触れた。

縄は汗とは違うもっとネットリとした体液に濡れている事を発見してニンマリした。

「貴様らのような非国民が、今後どのような処罰を受けるか知っているか？」

上半身を菱縄に固く縛られ、身動き出来ない女達を見下ろしながら、中島が大声を立てた。

「貴様らは、この重大犯罪の罪を償うため、この後戦地に送られ、最前線で戦う兵隊さんのための肉体動員として、その体を捧げることになっているのだ！」

無論、口からの出任せであったが、度重なる拷問で精神が混乱していた女達には本当のことのよ

うに聞こえ、この後迎える事になる残酷な運命を思うと悲鳴を上げた。

「貴様らの漏らした情報により、戦地では何人もの兵隊さんが、無残に敵軍に殺されたんだぞ！そのせめてもの罪滅ぼしに、貴様らはその体を使って、傷ついた兵隊さんを慰めてあげるのだ！・・・

仲間を貴様らに殺された兵隊さんが、貴様らをどう慰み者にするか想像してみるが良い・・・」

中島の脅しに、陰惨な光景が臉に浮かんだ、女達は体をガタガタと震わせた。

「戦地に送る前に俺達で、男好きのする体にみっちり鍛えてやる。」

中島が言い放つと、男達は一斉に女達に飛び付き、禪のように股間を縛っていた股縄をせかせかと解き始めた。

「ほう、貴様、蠟責めと鞭責めが余程気持ち良かったと見えるな？」

中島が夫人の股間から麻縄を解きながら言った。

激しく頭を振る夫人に、「違うと言うのか？それならこれは何だ？」

これは、どう言う訳だと、ネットリとした体液に濡れた縄の結び玉で夫人の頬を撫でた。

「ああ・・・お止めになって下さい」

夫人が小さくすすり泣いた。

熱蠟と鞭の苦痛に責め立てられて錯乱する意識の中で、股間を突き上げる痛痒感を伴った強い刺激に思わず、すがってしまった自分の浅ましい姿が、心の中に恥ずかしく蘇り自分を責め立てた。

「こちらのご令嬢も、もう楽しむコツを知っているようだ！」

緑子の股間を摩擦し続けていた、縄がじっとり濡れていることに気付いた大島も大声を上げた。

涙を流しながら頭を振る緑子に

「それなら、これは出し残りの小便か？」と笑いながら揶揄した。

「貴様も、子供のような体をしながら、随分おませだな？」

順子の体を撫で回しながら小島が言った。体を身悶えさせて拒もうとする順子であったが、小島の節くれた指で撫で回された秘裂に潤いを感じられるようになって来た。

指に絡む純潔の証である、薄い膜が小島の心を有頂天させた。

「しかし、俺達二人でこちらのお嬢さんを頂いて良いのか？」

小島が、中島に聞いた。

「ああ、俺は後で後ろの純潔を貰う」

中島には、順子の直腸内を指で探った時のあの不思議な感触が気になっていた。そして自分の肉棒を使って確かめてみたいと思っているのだった。

身動き出来ない女達は上から男達に組み敷かれ、柔らかな腹や胸を優しく撫で回され、太股や秘所を愛撫され続けた。

何時しか女芯の周りも赤く充血して柔らかく膨らみ、潤いも出て来た。

頃は良しと見た男達は、自らのいきり立つ隆起を女体の中心部に押し当てた。

自分たちが守ってきた純潔が、この残酷な憲兵達に奪われる時が来たと娘達は観念した。

アアー！痛い！と娘達が悲鳴を上げた。

ブツブツと繊維の束を無理矢理引き千切るような感触が肉棒の先端から伝わって来た。

征服感に酔い痴れながら、柔らかい女体に自分の灼熱した肉塊を突き立てる感触に男達は狂喜の声を上げた。

「どうだ、良い気持ちだろう？旦那とは随分ご無沙汰だったんじゃないか？こんな良い気持ちにさせてもらったのは久しぶりだろう？これからは何時もこんな良い思いが出来るようになるぞ。」

しっとり濡れ広がった華洞に、何ら抵抗なく怒張を出し入れしながら、中島が聞いた。

アア・イヤ、と喚きながら、若い憲兵中尉の肉根を受け入れている自分が惨めであった。

そして、自分の主人とは比較にならない粗野で逞しい肉棒に突き上げられ、心では拒否しても、自らの肉体は心を裏切り、感じ始めている熟れた自分の体が恨めしかった。

女学校を卒業して早々、金田伯爵の基に輿入れして、二人の娘を若くしてもうけてから、女性の喜びを知る頃には、年齢の差の故か、もともと性には淡泊なところがあった伯爵は、自分の体に興味を失ってしまったのか、この歳まで寂しい夜をおくっていた夫人であった。

しかし貴族の夫人として自分から性行為を求めるのは、はしたない事だと堪えていた体が、この異常な状況下で鬼のような若い憲兵将校に突き立てられ異常に燃え上がって行く自分に狼狽していたところであった。

中島も激しく腰を前後させながら、余り使い込まれておらず、最盛期の女体のまま封印されていたような夫人の締まりの良い女陰に有頂天になっていた。

「お母様が悪いのよ！お母様が敵国のスパイに内通するから私達もこんな眼に会うのよ！お母様なんて嫌いよ！」

大島に犯される緑子が、突然ヒステリックな声を出して、泣きながら母親を詰った。

「違うわ！あれは悪い使用人に欺された、お父様がやったことよ！」

母親が中島に激しく突き立てられながら混乱する意識の中で、絶え絶えの息で叫んだ。

「お姉様もお母様も止めて！ 悪いのは……、アアーッ！痛い！」

順子が途中まで言いかけて、小島の太い男根を激しく突き立てられ、仮借無い責めに悲鳴を上げた。

とうとう、この高慢な貴族一家の気位を粉々に打ち砕き、家族の絆もズタズタにしてやったと云う、勝利の快感に中島は酔い痴れた。

そして、その心の底から突き上げるような快感は、夫人の快樂のツボを突き立てる怒張につながり、更に大きさと硬さを増して行った。

中島に組み敷かれながら、激しい体の動きに煽られ、身悶え苦痛とも快感ともつかない声を何時しか上げ始めている夫人がいた。

逞しく隆起した分身を熱く熱を帯びた華洞に出し入れする毎に、秘孔の奥深くから熱い体液を夫人を責め立てる肉棒に浴びせかけてくる成熟した女体に、中島は有頂天になっていた。

英国滞在中に英国貴族と交わり、テニスや乗馬を趣味とするようになった聞いていたが、これらのスポーツを通して下半身が鍛えられたのか、二人の子をもうけた経産婦特有の筋肉の緩みは見られず、その後の伯爵との性行も少なかったのも幸いしたのか、夫人のその部分は、二十代の女性の締まりの良さを取り戻していると、激しく前後に腰を注送しながら思った。

そして、中島が腰を引く時、切なそうに眉を蹙めながら、秘められた筋肉で強く喰い締め、奥深く肉洞に捕らえた肉塊を逃すまいとするかのように締め付けてくる一無意識に名器と形容されるような機能を発揮し始めた夫人に目を瞠った。

夫人の儚い抵抗をあざ笑うかのように、濡れそぼった肉孔から、隆々とした肉塊を完全に引き抜いたとき、夫人は満たされなかった肉体の欲求に体内から煽り立てられるように、切なそうに息を吐き、恨めしげな目で中島を見上げた。

中島は夫人の様子に気が付かない振りをしながら、体の下に組み敷いた夫人の乳首や股間の肉芽を指先で撫で回した。

そんな、中島の老獪なテクニックに焦らされ、夫人は切なそうに顔を左右に振り立てた。

こうなれば伯爵夫人も百姓娘も変わらないな・・・と、すっかり自分のペースに巻き込まれた夫人を見つめながら思った。

「どうしたのだ？」

満たされない肉欲に身悶える夫人をじっと見下ろしながら、ニンマリと笑みを浮かべて、嫌らしく尋ねた。

夫人は目を厳しく閉じたまま、真っ赤にそまった顔を激しく振り立てると、消え入りそうな声で

「ああ・・・お願い・・・」と、呟いた。

この気位が高く貞淑な貴族の淑女が、自らの肉欲に煽り立てられ、そのような言葉を口にしたことに、ニンマリと笑みを浮かべると、

「どうして欲しいと言うのだ？」

指先で夫人の股間の肉芽を摘みながら、意地悪く質問した。

「アア！・・・入れて下さい・・・」

夫人は自分の発した恥ずかし欲求に恥じ入るように、顔を真っ赤に染めて、激しく首を振り立てながら泣きそうな声を上げた。

夫人の苦悶を楽しそうに見つめながら、

「ほう？どこに入れて欲しいと言うのだ？」

ここか？ここか？とワザと夫人の身悶えを楽しむように、指先で臍の穴を突き立てたり、後ろに指を回して菊花の上を意地悪く触った。

「アア！イヤッ！」

中島の陰険な責めに夫人は涙を流しながら身悶え続けた。

「それとも・・・ここか？」

中指の腹で夫人の濡れそぼった媚肉の狭間を嫌らしくなぞった。

「アアッ！そこに入れて！」

と夫人は堪らず悲痛な声を上げた。

夫人が体内から突き上げる肉欲に煽り立てられ、抜き差しならない状態に追い込まれている事を確認して、「入れて欲しければ、言葉で何処に入れて欲しいか言うのだ！」

と、指先で愛液を垂れ流す秘孔の周囲を撫でながら、夫人の口から卑猥な言葉を言わせようとする中島であった。

「・・・」

流石に夫人もそのような恥ずかしい言葉は口に出来ず、しかし一方では、押さえの効かない肉欲に嗚咽しながら、身悶え続けていた。

「ほう？流石に博識な伯爵家のご令室もこの言葉は知らないようだな？・・・ここは、な・・・オ〇〇〇、と言うんだ、静江のオ〇〇〇に入れて、と言ってみろ！」と、貴族の夫人の口から卑猥な言葉を言わせようとしていた。

「アアッ！イヤッ！」恥ずかしい言葉を口にすることも出来ず、その間に中島の卑猥な指先は、秘孔をなぞり、愛液に濡れた指先を後ろの穴に吐き入れようとしていた。

「お願いします・・・静江のオ〇〇〇に入れて下さい・・・」と、蚊の泣くような小さな声で中島に哀願した。

とうとう、この貴人が卑猥な言葉を口にするまで追い込んだ事に、中島は卑猥な笑みをたたえながら、

「声が小さくて聞こえなかったな・・・」と、夫人を更に追い込むのであった。

「お願いします！どうか静江のオ○○○に入れて下さい！」と、今度ははっきりと口にした。

それでも中島は更に夫人の懊悩を楽しむかのように、

「聞こえんな・・・もっと大きな声で言ってみろ！」と、夫人を追い込むのであった。

緑子も順子も大島と小島から組み敷かれ、既に新鉢を割られ、処女を思いのままに犯す快感に酔い痴れた凶暴な男達に獣欲の丈を放出されていた。

そのショックで未だ暴力行使者の肉棒を体内に収めたまま放心状態であったが、自分の母親の信じられない言葉を耳にして、思わず自分の不幸を忘れて、中島に責められる母の方を見つめた。

小島も大島も面白そうに中島と夫人の方を見ながら、その男女の卑猥な姿に煽り立てられて、娘達の体内に収めたままの肉体が再び硬度を増してくるのを感じて、ゆっくりと腰を使い始めた。

「入れて！静江のオ○○○に！オ○○○に入れて！」

羞恥に身悶えながら、もう押さえることも出来ず、悲痛な叫び声を上げるのだった。

その夫人の追い詰められて醜態を晒す姿を冷たい目で見つめながら、

「ほう？何を入れて欲しいと言うのだ？」と、更に意地悪く質問するのだった。

「指を入れて欲しいのか？」

と、中指をドクドクと熱い愛液を溢れさせる、充血した肉穴に差し入れ、その内部の絶妙な壁をまさぐった。

中島の巧妙な指技に、一瞬、ビクッと体を仰け反らしたが、柔らかく潤った肉洞は、細い指だけでは満足出来ず、逆に中島の巧みな操作により、一層追い込まれて行った。

「アア・・・意地悪・・・」

中島の巧みな指捌きに煽られ、恨めしそうな目で中島を見つめた。

「どうやら、伯爵夫人はこれの名前も知らないようだな・・・これはチン○○と言うんだ。」

懊悩に震える夫人を見つめながら、中島が言った。

「ほら、中尉殿の逞しいチン○○を静江の熟れたオ○○○に入れて下さいと言うんだ」

中島に命令され、進退窮まったように、「アアッ！中尉殿の逞しい・・・チン○○を・・・入れて下さい！」と、呻くように口走った。

「中尉殿の逞しいチン○○を静江の臭いオ○○○に入れて下さい、だ！」

羞恥の言葉を強制されて、顔を真っ赤に染めて、振り立てながら、涙に咽ぶ夫人に更に命じた。

「静江の臭い……、アアッ……臭いオ○○○に入れて下さい！アアーッ！イヤー！」

貴族の淑女として気も狂わんばかりの醜態を晒す、自分に恐怖しながらも、中島の指技に追い詰められた夫人は卑猥な言葉を口走るのであった。

「最初からちゃんと言うんだ！中尉殿の逞しいチン○○を静江の嫌らしいオ○○○に入れて下さい、だ！」と尚も夫人を羞恥の極みに追い上げて行くのであった。

「イヤーッ！……中尉殿の逞しいチン○○を静江の……嫌らしいオ○○○に……入れて下さい！」

堪らず夫人は悲鳴のような声で、中島に強制された言葉を口にした。

更に、中島は何度も何度も恥ずかしい言葉を連呼するように強制した。

何かに取り憑かれたように、自制の効かなくなった夫人は、絶叫するように卑猥な言葉を口走り続けた。

この高貴な伯爵夫人に最低の娼婦のような言葉を連呼させたことに、また一つ勝利の喜びに浸る中島であった。

そして、二人の娘は、男達に破られたばかりの女陰を再び責め立てられながらも、今や一匹の性に狂った牝と化してしまったかのような、尊敬と憧れを持って見ていた母の像が音を立てて崩れていくような、深い絶望感を感じながら、目に涙を溜めて、呆然と見つめるのであった。

「そこまでお願いされては、望みを叶えて上げない訳にはいかんな……」

とうとう、この気位の高い貴族の夫人を娼婦のような位置に突き落としたことに満足すると、中島はいきり立つ肉塊を夫人の華洞にグイッと突き立てた。

その瞬間、待ち焦がれていた物を体内に迎え入れることが出来た快感に、夫人の口から歓喜の呻きが上がった。

これまでの気品に満ち、父に良く仕える貞淑な女性として尊敬していた母が、肉欲に狂い、卑猥な言葉を連呼して、肉欲の本能に煽られるまま、男を求める浅ましい姿に、緑子も順子も股間を突き上げる激痛も忘れて、瞬きもせず、中島と母親の激しい性行を見続けるのであった……

夫人を続けて何度も絶頂に導いた後、断末魔の悲鳴のような、部屋に響き渡るような一際大きな夫人の絶叫に併せて、中島も緊張を解き夫人の体内に激しく放出した。

夫人の体から、まだ熱を持つ肉棒を引き抜いた後も、夫人の体は小刻みに震え、未だに夥しい熱い樹液を溢れさせる股間は、ピクピクと痙攣していた。

度重なる絶頂感に目が裏返り、速い息を吐く夫人の顔に、夫人の愛液と自分の精液で濡れたままの男根を近寄せると、そのまま半開きになった夫人の赤い唇に押し付けた。

突然押し付けられた、熱を帯びた肉塊ではあったが、夫人は荒い息を吐きながらも口唇を大きく広げ、中島の物を口内に迎え入れ、夫に対してさえ奉仕した経験は無かったのに、女の本能に煽られるかのように、無意識に舌先で中島の物を嘗め上げ、肉塊に付着した汚れを丁寧に拭き取り、こびり付いた男の精のなごりと自らの樹液を喉を鳴らして嚥下するのであった。

その二人の様子に、股間から醜い物をぶら下げた、小島と大島が夫人に近づいた。

「今度は、こっちの物も嘗めて貰おうか。」と、床に仰向けに横たわったままの夫人の顔の両側にしゃがむと、夫人の柔らかい唇に濡れたままの肉棒を押し当てた。

「お前の娘は立派な処女だったよ。・・・最も、今はもう処女じゃ無いがな・・・」

と、笑いながら、二人で交互に夫人の口内にねじ込んだ。

「どうだ？娘の血と俺たちの男汁で濡れた、チン〇〇は美味しいか？」

と、大笑いしながら交互に夫人の口内に含ませるのであった。

既に抵抗する意志を失っているのか、夫人は男達から埋め込まれた、聖なる処女の赤い血と淫らな男の白い精液で汚れた肉棒を大人しく、舌を使って清めるのであった。

「イヤッ！やめて！お母様！」

自分たちの女肉を抉った肉棒を口に含み、舌先を使って、付着した汚れを拭き始めた時、娘達は母の舌先で自分たちの秘所を嘗められたようなおぞましい感触を感じ、堪らず悲鳴を上げるのだった。

三人の女を思う存分堪能し終わった時には、夜もとつぷりと暮れていた。

ようやく全身の縛めを解かれた女達であったが、恥ずかしい言葉を強制され、これまで経験した事の無いような苦痛と快感が恥辱の記憶として蘇るのか、一方、野獣の様な男達に純潔を奪われ、更に、女性として尊敬していた母の浅ましい姿を見せつけられたショックなのか、夫人も二人の娘もぐったりと放心状態のまま涙をすすっていた。

男達は炊事場から適当な食料を探し、軍隊用の携行食料と併せて、遅い夕食の準備を始めた。

女達にも喰うように言ったが、とても食事が喉を通るような状態では無かった。

男達は、女の尿の臭いや精液の臭いが立ち籠める異様な臭いの中で、放心状態の全裸の女達を監視しながら楽しそうに食事を続けた。

「いよいよ次は、あれをやるか？」

小島が中島の方を見ながら呟いた。

中島も無言で肯いた。

「それじゃ、今の内に沢山食べておいた方が良いな。」

と、若い大島が旺盛な食欲を見せた。

食事を終わり、一心地ついてから、男達は次の拷問の準備に取りかかった。

部屋の中央の滑車にイルリガートルと呼ばれる、円筒状のガラス製容器を吊した。

イルリガートルの上端は開口しているが、下端は半球状に閉じてその中心には、容器内に入れた水を滴下させたり、停止させたりする調節用のレバーが付いていた。そこに三つ叉の分岐を取り付け、三本の飴色のゴムチューブを繋いだ。

準備が整って、男達は三人を軽く後手に縛ると、新たに設えた拷問道具の下に強引に引き立てた。

天井からぶら下げられた、生まれて初めて見る、バケツのような大きなガラス容器とそこから垂れ下がる三本の飴色のゴムチューブを見て、女達はこれから自分たちの身に降りかかる不気味な拷問に怯えた。

男達は三人の女を、大理石の床の上に、所謂マングリ返しの形に固定した。

三人の互いの背中が一つに触れあうように配置し、体の上で大きく開いた脚は、動かないように隣り合う女の脚と一つに縛り上げた。

各人の脚がそれぞれ 120 度に開脚し、背中合わせに縛り上げられた姿は、何かお尻を花の中心として、六本の脚が、まるで花卉が開いたように映り、地上に桜色の美しい肉の花が開いたようだと思わず見惚れた。

女達が首と肩で体重を支える、大理石の床は、数時間前に静江夫人が放尿して水溜まりを作った場所であった。夏の暑さゆえ、今は、水分はほとんど蒸発していたが、床はまだベタベタとして、鼻や目を刺激する異臭が残っていた。

男達が、頭上の巨大なガラス容器にバケツを使い水を流し込むのを女達は怯えた目で見ていた。

そして、イルリガートルから垂れ下がる三本のゴムチューブの先端に取り付けられた、金属製の嘴管を摘むと真上に向いた女達の肛門にゆっくりと装入し始めた。

金属の管の外形は、5ミリも無くそれほど太い物では無かったが、女達は初めて肛門に異物を突き立てられる違和感に体を硬くして悲鳴を上げた。

男達はそんな女達の反応を無視するように、あるいは楽しむように嘴管をその中心部に押し当て、その内部に向かって深く突き刺した。

女達の虚しい抵抗を易々と排除して、菊の蕾を割って深々と突き立て、しなやかなゴム管をグイグイと引っ張った。

ゴムの弾力を受けて尻穴を挟む金属管が、周囲の筋肉を引っ張り、嫌らしい刺激に女達は悲鳴を上げた。

こうして、少々女が体を動かしても抜け落ちない事を確認した後、不気味な笑みを浮かべて無言のままイルリガートルのコックを捻った。

真上を見上げる女の目に半透明の飴ゴムを通して、薄気味悪い液体が落下して来る様子が映った。

そして嘴管を通して冷たい浣腸液が体内に入ってくる事を感じた。

一つのイルリガートルの内容物を三人で分け合うため、ガラス容器内の液面の低下速度は速く、見る見る液面が低下して行く様子が見えた。

1リットル入りの容器が見る見る無くなり、一人当たり 300cc を受け入れたことになる大腸が膨張するのを感じ始めた。

あと僅かでガラス瓶の中が空になり、注入がやっと終わると思って、ほっとした瞬間、中島が新たな浣腸液を容器に注ぎ込む様子が真下から見上げる女達の目に入った。

更に腸内に浣腸液を受け入れなければならない現実には、女達は暗い気持ちになった。

こうして容器内の浣腸液が無くなりそうになる度に、新たに追加され何時終わるか分からない責めに恐怖を覚えた。大腸を内部から押し広げようとする膨張感に苦痛を感じ始めていた。

更に浣腸液の追加を受けて、連続で5リットルの浣腸液を3人の女で分け合ったことになった。

ようやく嘴管を肛門から抜き取られて、浣腸は終了したが、大腸の中に流し込まれた浣腸液のどっしりとした重量感と腸壁を押し広げようとする苦痛に顔を歪めて悶え苦しんでいた。

ここで男達は金属の器具を手で女達に近付いて来た。股を全開した女の前に腰を折ると、無理矢理女の口をこじ開け、手にした開口具を嵌め込み、口を全開にした状態で固定した。

腸内に注入した浣腸液の必然的結果として、やがて真上を向いた肛門から糞便を噴水のように真上に向かって噴き上げることになる。

その時、落下して来た糞便が口内に飛び込むように、開口具で口を全開にしたことが分かって、女達は男達の残酷さに青ざめた。

しかし、女達が男達の本当の残酷さを知るのはこの後であった――

男達は更に鉄板で作った器具を取り出した。横幅40センチほどの鉄板には、高さ20センチほどの衝立のような鉄板が2枚溶接されており、衝立板には革ベルトが取り付けられていた。

男達は女の頭を持ち上げると、床と頭の間にその鉄製の器具を滑り込ませた、女の頭がその2枚の衝立の間に入るように頭を下ろした。女達の顔はその二枚の衝立板の間にスッポリ入り、真上を

向いたまま、ほとんど顔を動かす事が出来ない様に固定されてしまった。更に顔の動きを完全に封じるため、衝立に付けられた革ベルトを額の前で固定して、僅かな身動きも封印してしまった。

この大きな鉄の首枷により、もはや女達は、自分たちが嘔き上げるであろう、糞便から顔を背けて避ける事も出来ず、上を見上げたまま全開の口で受け止める以外に無い状態に追い込まれた。

この破局から逃れるためには、排便を堪えるしか無いが、腸内を駆け巡る水流はそんな努力を嘲笑うかのように、女達に抜き差しならない苦痛を与え続けた。

「今度は誰が最初に噴水を上げるか賭けないか？」と中島が持ちかけた。

「良いだろう、今度は一番歳の若い順子に賭ける」と、さっきの賭の負けを取り返そうと大島が一番に声を掛けた。

「それじゃ、俺が一番年上の静江だ」と小島も乗ってきた。

女達は油汗を流し、苦痛の身悶えしながら、必死に破局の時と戦っていた。

「このままでは、まだ面白くないな。」

中島が立ち上がると、イルリガートルから吊り下がるゴムチューブの先端の嘴管を少し細い物に取り替えると再び、女達の頭上にセットした。

そして嘴管を今度は女達の尿道孔に装入しようとした。本来物を受け入れるように出来ていない場所に管を差し込まれる痛みに、女達が泣き喚いた。

こうして、セットし終わると、中島は仲間の元に戻り、何やら耳打ちした。

「そうか、俺も丁度溜まっていて、さっきから我慢していた所だ。」と、言う小島の声が耳に入った。

男達は足下にバケツを置くと、バケツの中に放尿を始めた。

男達は女に背を向けるように放尿していたのでその姿は見えなかったが、バケツを叩く音が嫌でも女の耳に届いた。

そして、まだ温かいバケツの中の黄色い液体をイルリガートルの中に流し込んだ。

男三人分の小水で満たされ、容器から溢れんばかりとなった。

コックを捻ると、生暖かい液が今度は、尿管を通して膀胱に逆流を始めた。

腸内を掻き乱す苦痛に、必死の思いで耐えていた女達に、今度は更に膀胱からの苦痛が加えられた。

「これでケツの穴からの噴水だけでは無く、前の穴からも噴水を噴き上げるだろう」

女達の尿道孔から金属管を抜き取りながら、残酷な目で、悶え苦しむ女達の様子を眺めた。

イルリガートルを吊していた滑車には、替わって100ワットの裸電球が吊された。

真上から明るく照らし上げられて、女達の大きく開花した秘所は、隠しようも無く男達の目にくっきり

と映った。

三人の女が輪を作るように、臀部を真上に上げて互いに接し、両足を下方に突き出す姿は、地面から直接に咲いた巨大な花のような何か妖しげな美しさを醸しだし、単体の女体を超えた妖艶さを感じさせた。

女達の脚はまるで巨大な花卉のように見え一つま先から太股に向かい―花卉の先端から付け根に目を移動すると、本来の花なら雌蕊や花蜜を蓄える中心部には、生々しい三つの花芯が存在していた。

体内から突き上げる間断無い苦痛と戦い、女達の真上に向いた尻は汗でビッシヨリ濡れ、会陰部はテカテカと光っていた。そして、会陰の頂点を占める肛門がヒクヒクと痙攣し、その痙攣の強さと頻度が次第に激しくなるのが分かった。

崩壊は間近に迫ったな―と、中島は、ほくそ笑んだ。

女達は開口具により、思い切り広げられた口から、苦しそうな呻き声を上げ、首枷に固定されて身動き出来ない顔にビッシヨリと汗を浮かべ悲痛に眉根を顰めて、身悶えしながら、最後の抵抗を試みているが、最後の瞬間を僅かな時間しか先送りすることしか出来ないだろう。

夫人が絶望的な色を含んだ恨めしそうな目で、俺の事をじっと見つめている―しかし、俺にとってはこの伯爵夫人の眼差しは勝者の快美感を増長させるだけだ―と心の中で思った。

女達は、浣腸液を注入されてから30分近くも良く耐えて来たが、最早限界である事を感じていた。

最初の頃、何時終わるとも分からず、何度も大量の液を注入された時は、大腸の膨張感による苦痛が主であったが、今は腸内で荒れ狂う浣腸液が苦痛の主要因となっていた。

大量に体内に注ぎ込まれた液が腸内の汚物をドロドロに溶かして巻き込み、濁流と成って腸内を駆け巡っていた。

そして、この濁流は出口を求めて肛門に集中し、今にもその堰を打ち破って外部に噴出しそうに圧力を増していた。

三人の女は、全身を苦痛に蠢かせ、苦悶の表情を浮かべ全身にびっしょり汗を浮かべていた。

互いに背中を寄せ合い、励まし合うかのように互いに接した手と手を強く握り締め合い、耐え難い苦痛を堪えていた。

激しい痙攣を伴う苦痛に絶望的になりながらも必死に耐えて来たが、今また、膀胱内に強制的に男達の尿を注入され、痛みを伴った膨満感により前と後ろからの苦痛の板挟みを受け、下半身を前後から襲う、荒れ狂う激痛により、男達の目前に決して晒し柄はならない、恥ずかしい二つの秘

部を晒す羞恥も、自分たちの吹き上げる汚水を全身に浴びる恐怖も意識出来なくなって来ていた。

意識は朦朧とし、目はかすみ、何も聞こえず、気が遠くなりかけていた。

不意に緑子の肛門周辺がモリモリと盛り上がったように見えた。

次の瞬間女達の悲痛な叫びと共に、長い間内部から強烈に突き上げる圧力に耐え、必死に押さえ込んできた菊の蕾の形をした弁を烈しく打ち破り、中心から汚濁の噴水が上がった。

「おお！初めだぞ！」男達が歓声を上げた。

緑子の菊花から吐出された褐色の噴水は、1メートル以上も真上に吹き上がり、火山弾や溶岩の噴出を含む火山の噴火のように泥濘状の汚物や固形の汚物も撒き上げた。

高く頂点まで舞い上がった黄褐色の汚水は、やがて落下を始め、夕立のように女体にも床にも周囲に降り注いだ。

女達の目にも、明るい電灯に照らされ、高く噴き上げた汚水が自分に向かって降り注いで来る様子が、まるでスローモーションのようにまざまざと映った。

緑子の噴き上げた汚物は、隣り合う、母や妹の尻をビチャビチャと濡らし、泥濘に混じった固形物が三人に降り注いだ。

これらの濁流や泥濘は、閉じる事を封じられ、真上に向かって全開に開け放たれた口中にも飛び込み、口内に汚物の池を作った。

ウウツと呻き声を上げて、妹の順子が、ついに堪えきれず放出を開始した。

垂直に噴き上げられた濁流は、姉が汚した尻や体や顔の上にビチャビチャと新たな汚物の山を重ねた。

最後に母親の静江がとどめの噴出を開始した。

「おお！これは凄い！」

と、男達が大声を上げた。

三人の中で一段と激しい汚水の噴出と共に、胎内に養われていた巨大な蛇が勢い良く体外に飛び出したかのように軟化した長い固形物が吹き上がった。

その姿はまるで龍が天に駆け昇るようであった。

天高く舞い上がった長い長い軟便は、やがて降下を始め、三人の尻の上に落下し、そこで幾つにも碎け散り、脚や腹や顔や床面に降り注いだ。

最初に噴出した、緑子や順子は、もはや高く噴き上げるだけの勢いを失い、火口から溶岩を流すように、ドロドロと軟化した汚物を何時までも流し続けていた。

その汚物の泥濘は股を通して腹を伝わり、背中と床の間に流れ込み床に汚物の山を築いた。

その時、突然緑子がまるで後産のように小水の噴出を始めた。

肛門の緊張を失ったと共に、膀胱に外部から注入された小水の圧力に尿道の緊張が負けて放水を始めたのだった。

それにつられて他の女達も自分のものか男達のものか分からない小便を放出し始めた。

雨のように落ちて来た小水は、体に付着した不潔な固形物を洗い流して行くようであった。

ようやく体内の汚濁物を全て放出し終えて、辺りには静寂が訪れた。

明るい電灯の光に照らされ、全身を自分たちの放出した糞尿にまみれさせる女達を凝視した。

あまりの静けさに女達がこのまま死んでしまったのでは無いかと心配になり、じっと女達の顔を覗き込んだ。

「可哀想に、高貴なご尊顔が糞まみれじゃないか・・・」

中島が悪臭を放つ糞便に汚された女達の顔をしげしげと覗き込みながら言った。

「少し汚れを落としてやろう」

と、言うトズボンの前を開いて、一物を取り出し、左手でそれを支えると母親の顔目掛けて小水を放出し始めた。

中島の放尿を受けて、静江の顔から汚物が流れ落ち白い肌が現れだした。

それをまねて他の二人も、娘達の顔に笑いながら放水を始めた。

今回のショックはあまりにも大きすぎたのか、抗うこともなく、ただ女達は放心したように、温かい男達の排泄液を無抵抗のまま受けていた。

口内に注ぎ込まれた小水に反射的に咽せて咳き込むことはあったが、体を振って拒んだり、涙を流したり、悲鳴を上げることさえ出来ない様だった。

男達の排泄が終わりしばらくした頃、突然緑子がケタケタと笑い声を立て始めた。

全身に自分たちが放出した液状便を浴び、粘状便や便塊を付着させた、糞尿にまみれ悪臭を放つ緑子の顔を覗き込みむようにしながら、中島が話しかけた。

「そうかい、そうかい、そんなに面白かったかい？これから、もっともっと面白い事を沢山やってあげようね・・・」

美しい石に彫刻され磨き上げられた美術品のような気品を秘めた貴族の娘をこれ以上ない汚辱の中に突き落とし、遂に身も心もボロボロに破壊したという勝利の快美感に漬る中島の目は、大島や小島からも狂気を帯びているように見えた。

開け放たれた口内にいまだ幾つもの便塊を含み、顔一面を汚物で濡らした緑子は、焦点を失ったうつろな目で上を真上を見上げながらケラケラと笑い続けていた・・

女達が死んだように横たわっている間に、男達は風呂の準備を始めた。

男達は、糞尿に塗れて悪臭を放つ女達を引きずるように風呂場に連れて行った。

金田家の白亜の洋館には西洋の家をまねて、各人の個室には洋風バスタブが設置されていたが、温泉好きの伯爵の趣向もあり、日本風の浴室もつくられていた。

そこはかつて大勢の使用人が働いていた時に使用人も入浴を許されていた物で、時間を区切つてではあるが、大勢の使用人も一度に入浴できるように温泉のように大きな浴槽を持った浴室となっていた。

河岸に上げられたマグロのように、浴室のタイルの床に力なく横たわる母娘に、男達は桶に汲んだお湯を何度も何度も全身に浴びせかけた。

お湯を浴びせられるごとに、女達の体にこびり付いた汚物が、瘡蓋が皮膚から剥がれ落ちるように剥がれあるいは温かいお湯に溶かされて流れ去っていった。

不潔な悪臭は段々消えて行き、白く透き通るような肌が姿を見せ始めた。

更に男達は石鹼で、女達の髪を洗い、長い髪の奥に染み付いた汚れを洗い流し、更に石鹼の泡で全身を清めた。

不快な臭いは、しだいに消え去り、高級な石鹼の香料の香りが男達の鼻孔をくすぐった。

男達に全身を洗われながらも女達は、受けたショックが余りにも強かったためか、放心状態で男達に体を預けていた。

男達は無抵抗な女達を抱き上げると、女を抱いたまま温かい湯船に体を沈めた。

伯爵邸の大きな浴槽は3組の男女が同時にゆったりと漬かることができるほど大きなものであった。

久しぶりに温かい湯に漬かって、男達は疲れた体と心が安まって行くのを感じていた。

女を前に支え、体を密着させて暖かい湯に漬かっている間に、死んだように冷たくなっていた女達の体も次第に温まってくのを感じた。

リラックスして来たところで男達は前で支える女の体をまさぐり始めた。

温かい湯に漬かりながら、中島は夫人の両乳房に背後から手を伸ばし、抱き重りする豊満な夫人の乳房をゆっくりと揉みしだき始めた。

中指と薬指の間に夫人の乳首を挟み、量感のある柔らかい乳房を揉みながら同時に乳首を刺激

した。

更に左手で乳房を揉みながら、右手を下腹に下ろして、股間の水草のようにお湯の中で揺らぐ恥毛を掻き分けて指を内部に差し入れた。

ふと見ると小島は背後から緑子を愛撫し、大島が順子の背後から同じように愛撫を加えている様子が澄んだお湯を通して見られた。

精神が壊れ始めていた緑子は、焦点の定まらない虚ろな目をして、唇を半開きにした弛緩した表情で、小島の老練な愛撫を受けていたが、順子は完全な放心状態が続いており大島の荒々しい愛撫にも反応を示すことは無かった。

放心状態が続く静江夫人も中島の巧みな指技に対しても女性の生理的反応を示すことは無かった。

しかし、湯にのぼせて額に汗を浮かべながらも中島が丹念に乳房と股間への愛撫を続ける内に、やがて夫人の体内を巡る自立神経網がお湯の温かさにより弛緩し、正常な反応を回復し始めたのか、乳首が屹立し、股間の突起も勃起を始めたことが認められた。

それでも、心に受けた傷は余りに大きかったのか、女体の生理作用に基づく体調の変化は、現れつつも感情の変化は見られず、相変わらず茫然自失の状態が続いていた。

お湯の中で股間に愛撫を加える自分の指に絡み付く、濃密な下草を意識する内に中島に新たな考えが浮かんで来た。

夫人の胸と股間を両手で支えたまま、浴槽から立ち上がると、夫人を浴室のタイルの床に横たえた。

小島と大島が貴族の娘を愛撫しながら中島の次の行動を興味深げにしげしげと見つめた。

中島は仰向けに横たえた夫人の両脚を、大きく左右に広げさせた。

自らの意志を喪失したままの夫人は、男の手で大きく股間を広げさせられても羞恥も拒絶反応も示さず、されるがままに嗜虐者の眼前に股間を大きく広げたままであった。

次に中島は、石鹸を手にすると両手で泡立て始めた。

さらに石鹸と泡だった両手を夫人の股間に押し当て、股間の繁みに揉み上げ泡を立て始めた。

泡が十分に立ち、艶のある黒い繁みが白い泡で完全に覆われ、股間に小高い白い泡の山をつくると、満足げに背き、カミソリを手にして夫人の大きく開いた股の間に立った。

中島の意図を理解した、小島と大島が湯に漬かりながら、中島の動きを注視した。

中島が夫人の下腹にカミソリの腹を当てスッと引くと、カミソリの歯が通ったその後に真っ直ぐな道が現れるように白い肌が姿を見せ、代わりに繁茂していた春草が刈り取られた。

静江夫人は憲兵中尉に剃毛されるという辱めを受けながらも、すっかり諦め切ってしまったかのように、哀しい目の色を両眼にたたえて、じっと中島が操るカミソリの動きを哀しげに見つめるだけで、声を上げたり体を振って抵抗を示すことは無かった。

中島は丹念な仕事を終え、夫人の下腹から全ての飾り毛を奪い取った。

桶にお湯を汲んで、残っていたシャボンの泡を洗い流すと、その後に童女のように白くスベスベした肉厚の花弁が露わとなった。

「どうだ？赤ちゃんに戻ったみたいだろう、娘達より若返った気分じゃないか？」

中島が盛んに夫人を揶揄するが、夫人は恥ずかしい股間を閉じる意識も失い、ただ哀しげな目で中島を見続けるだけであった。

小島と大島も、中島の真似をして二人を湯船から上げると、股間の繁みを剃り上げ始めた。

緑子は相変わらずケタケタ笑いながら大人しく小島の手の動きを見つめ続けた。

順子もようやく生え揃い始めた春草を大島に刈り取られ、元の童女のような姿に戻されて行った・・・

剃毛作業を終え、すべすべした陰部を掌で撫で回し、出来映えを確認した中島は、次に自分の体に石鹸の泡を塗りたいと、股間を開いたまま大人しくタイルの上に横たわる夫人の上に覆い被さって行った。

そのまま、石鹸で潤滑された体を夫人に密着させて、体を動かすと得も言われぬ皮膚感覚が襲った。

体は正常な神経感覚を取り戻しつつも、精神的には外界の刺激を遮断されてしまっているかのように、反応を示すことの無かった夫人の体が、この鋭敏な皮膚からの刺激にピクッと反応した。

更に全身を使った愛撫を駆使する内に、極弱くではあったが、夫人がハアと甘く呻き声を上げるのが聞こえた。

茫然自失状態で死人のように反応を示さなかった夫人が、ようやく正常な身体反応を回復し出したことに喜んだ中島は、膨らみ始めた股間の花肉の間に石鹸の泡により充分潤滑された自分の肉茎を押し付けると、繁茂を喪失しツルツル滑る丘状の部分とその下の谷間を数回往復して、夫人の柔らかな秘園を刺激した後、ゆっくりと温かく柔らかい華洞の中に押し沈めて行った。

その瞬間夫人が小さくウツと声を上げて体をピクッと収縮させた。

男達はようやく女体の生理反応を回復し始めた女達に満足した様に、思い切り抱き絞め、強く責め立て始めた。

浴室から男女の嬌声が聞こえ始めていた・・・

そして、昭和20年8月15日、運命の日の朝を迎えた。

窓から差し込む優しい夏の早朝の光をその光沢ある白い肌に受ける三人の全裸の女がいた。

昨夜から休むこと無く責められ続ける女達は、今は男達から野太い張り型を突き立てられ責め立てられていた。

昨夜、女達は浣腸責めにより糞尿に塗れた全身を風呂場で男達によって洗われた。

2日ぶりの風呂であったが、浣腸責めにより自らの糞尿に塗れたことが余りにも大きなショックであったのか、女達は茫然自失のまま意志を失った人形のようにぐったりしたまま、男達から汚物を洗い流され全身を隈無く洗浄された。

体を清め終わり、すっかり元の美しさを取り戻した後、男達は、再びこの哀れな無抵抗の貴族の母娘を代わる代わる思う存分抱いたのだった。

女達に思い付く限りの姿勢を取らせて、何度何度も女達の体内に立て続けに放出した結果、睾丸に少し痛みを感じるまで精を出し尽くしていた。

そこで、体が回復するまでの間、これまでの激しい性交の余韻を楽しむかのように、今は性具で女達を責め続けているのであった。

後手に縛られ胸に縄掛けされた状態で男達に突き刺されながら、女達は歓喜とも苦痛ともつかない、忍び泣くような呻き声を上げていた。

朝日が差し込む窓の外からは、小雀のさえずり声や空に向かって羽ばたく音が聞こえていた。

若い大島は、太さが5センチ程の、表面に沢山の突起が植えられた一番大きな張り型を手にする
と、座禅転がしの姿で縛り上げられた夫人の背後から力任せに陰部に突き立てた。

分娩の経験があるとは云え、性に淡泊な伯爵との間には長い間性交渉は無く、昨夕中島に股間を割られるまで、久しく性交経験が絶えていた夫人にとって、大島が面白半分を選んだ、巨大な張り型は余りにも大き過ぎた。

度重なる責め苦と精神的ショックで身も心も疲労困憊し、ほとんど無抵抗のまま、この若い男に弄ばれる夫人であったが、メリメリと肉洞を内部から引き裂くような、息も止まる程の強い苦痛に、思わず眉間に皺をつくり呻き声を上げた。

その夫人の苦悶の表情とヒクヒクする下半身の動きを楽しむかのように、

「どうした？あんな大きな娘を二人も産み落としているのではないか、これぐらいどうって事無いだろう？伯爵夫人の貫禄でこの大きな張り型を堂々と楽しんだらどうだ」

と揶揄し、夫人の良く張った豊かな双臀を平手で赤くなるほど叩き、再び夫人に苦悶の涙を流させながら、肉の抵抗を押しつけて力任せに巨大な張り型を前後に操るのであった。

小島は、後手に縛り上げた全裸の緑子の下腹を膝の上に載せて、尻が上を向くような姿勢を取らせて、処女を失ったばかりで何度も男達に蹂躪されて痛々しい程傷つき腫れ上がった、緑子の陰部に張り型を突き立てていた。

極限を超える責め苦により、精神を破壊されてしまったかのような緑子には、かつてのような貴族の娘としての凛々しい気品は消え失せ、虚ろな目をした弛緩した表情で、小島の責め苦に抵抗する事も無く、大人しく受け止めていた。

老練な小島は、若い大島のようにただ力任せに突き立てるのではなく、女性の感じるツボを良く心得ており張り型を操り丁寧に快感のツボを刺激し続けた。

その小島の熟練の技を正面から受けて、精神が崩壊し始め貴族としての気高いプライドを喪失してしまったのか、弛緩した緑子の顔面には明らかに喜悅の表情が浮かび始めていた。

張り型を受け止める股間の狭間から熱い夥しい熱い体液が滴り落ち、緑子を載せた膝を濡らし始めた。

夥しい愛液が張り型との隙間を縫って溢れ出し、愛液に艶々と濡れたその直ぐ傍の愛らしい木の芽がむくむくと屹立していた。

小島は思わず双臀に顔を近づけ、若い女から湧き出す、甘い愛液を心ゆくまで啜り、女の木の芽を思い切り吸い上げた。

人間としての正常な精神を破壊されてしまった分、動物的本能が表に現れ始め、女体が秘めている肉欲が外面に顕れ始めたのか、小島の老練の技に性欲の本能が刺激され、歓喜の声を上げ身悶え始める緑子がいた。

そして、小島は、貴族の娘としての理性を失い、喜悅の声を上げながら、ただ男を喜ばせるためだけの生き人形と化した緑子を楽しむかのようになおも執拗に責め立て続けた。

直径 3 センチ以上ある太い張り型を、順子の菊花に突き立てながら、中島は昨晚の信じられないような体験を思い出していた。

中島には、身体検査の時に気付いた、順子の後ろの穴の能力を確かめてみたいという欲望があ

った。

あの中指をきつくリズムカルに締め付けた動きを自分の肉棒を使って確認して見たいと思ったのだった。

余りに大きなショックのためか茫然自失状態の少女に、犬の様に四つん這いの姿勢を取らせて、可憐な蕾のような華奢な尻穴を間近に覗き込んだ時、果たして自分の太い物を突き立てたら、引き裂けて血だるまになってしまうのではないかと感じた。

暫くして順子も自意識が蘇り始めたのか、自分が次に受ける責め苦への恐怖にブルブルと小刻みに震える尻を中島は強引に左手で抱え込む様に押さえ付けると、右手の中指に油をすくい取り、菊の蕾の中心に油を塗り込んだ。

油を塗った指で優しく肛門周辺のマッサージを続ける内に、尻穴周囲の筋肉がどんどん柔らかさを増し始めるのが分かった。

順子も中島の次の蹂躪の狙いが何処であるか理解し始めたようであるが、最早抵抗は出来ないものと諦めたのか、小さく悲鳴を上げながらも、無抵抗に中島に尻穴をまさぐり続けさせた。

十分菊の蕾が柔らかく開いて来たのを確認してから、最初にゆっくりと確かめるように、きつく締め付ける肉孔に中指を挿入したが、難無く入り、例の腸全体の蠱惑的なリズムの締め付けで中指を迎えた。

次に人差し指を添えて二本にしても、それに追従するように柔らかく尻穴が開いて迎え、問題なく体内に収めた。

変わらずきつい締め付けは続いていたが、二本の指を突き立てられた肉洞はゴムのような弾力を持ち、なおかつ柔軟な筋肉で覆われているのか、挿入した指を肉洞内で押し広げても、なおも余裕を持って広がるようであった。

その柔軟な蕾を更に押し広げ、薬指を含む三本の指まで突き立てた。

尻穴を大きく広げられる苦痛のためか、順子は小さく呻き、尻を振るわせた。

順子の苦悶を無視するかのように、突き立てた三本の指をそれぞれの方向に動かし、ぽっかりと開いた空ろを無理やり大きく押し広げた。

性経験が豊富な熟練の女でも、前の穴ならともかく、これほど柔軟な後ろの穴を持った女はいないのでは無いかと、中島は思った。

三本の指で大きく拡張された、菊花の周辺はその周りにあった皺が全て消失し、今にも張り裂けそうに緊張した粘膜を見せていた。

三本の指を迎え、これ以上無いほど大きく開口した菊の華洞の隙間から、順子の腸内の香りが立

ち昇り中島の鼻腔をくすぐった。

順子は四肢を踏ん張り、顔を顰めて、口を強く結びこの苦痛と不快感に必死に耐えている様子であった。直腸内で三本の指を色々に動かすと、額や鼻の頭に汗を浮かべて、可愛い口から小さくヒィと悲鳴を上げて首を振った。

額にきつく縦皺を寄せ、小さく喘ぎ声のような悲鳴を発して、尻を身悶えさせながらも、順子の秘部に変化が生じ始めていることに中島は気が付いた。

おや？この娘は尻の穴で感じるのか？

成る程、女の尻の穴の筋肉と前の穴の筋肉は八の字の形をして、繋がっていると言う話は聞いた事があるが、後の穴をくじる内に前の穴も隠す秘裂も柔らかく開き始めたことに気が付いていた。

最初是一本の指でもきつuitと感じた筋肉の締め付けであり、とても自分の太い男根を受け入れるのは不可能ではないかと思ったが、弾力のある肉洞は強い締め付け能力を維持しながらも、まるでゴムが伸びるように肉の管を押し広げ、柔軟に指の追加にも堪えていた。

入り口の菊の花弁も充分柔らかく膨らみ、このまま男を迎え入れることが出来るのでは無いかと思った。

肉洞を内部から押し広げていた指を引き抜くと、入れ替わるように菊の蕾の中心に、自らの怒張を押し付け、そのままぐっと腰に力を入れた。

信じられないことに幼い少女は、菊の蕾の花肉を柔らかく膨らませ大きく開き始め、徐々に中島の太いものを受け入れ始めていた。

中島はそのまま腰を強く突き出すと、括約筋の反射的な抵抗を楽しみながらズブズブと深く腸内に押し込んで行った。

思っても見なかった自分の後ろを男に突き立てられることが、余りにも大きなショックであったのか、半ば放心したように、順子は最早悲鳴を上げたり、苦痛に身を振ることなく、幼い顔に汗を浮かべて、浅い短い息を吐きながら、腸内からこみ上げる凄まじい圧力に堪え、黙って中島のものを残さず体内に受け入れていった。

順子の直腸は突然の異物の侵入に驚き、本能的に体外に排除しようとするかのように、強い蠕動運動を中島の怒張に与えた。

そして、この強いリズミカルな締め付けが中島に得も言われぬ快感を与えた。

中島はこの快感をより強く得たくて、軽く腰を前後に揺すり、肛門に隙間無く食い込んだ肉塊を動かし始めた。

この時、紅潮した順子の半開きの口からハアと小さく声を漏らすのが聞こえた。

この純潔を失ったばかりの幼い貴族の小娘が、本当に尻の穴で感じているのか？と、訝り更に強く腰を振った。

順子は紅潮した顔を床に激しく擦りつけ、口を固く噛み締め、眉を顰めながら、必死に声を上げないように耐えていた。

しかし、この少女が肛門性行に感じているのは間違いが無いようだった。

犬のような姿勢の順子の背後から尻穴へのピストン運動を強くすると、直下に在る性器が一層充血し、膨らみを増し始めたことが分かった。

小島に犯されて純潔を失ったばかりの引き裂かれた処女膜の残滓が残る痛々しい華洞から一滴の愛液が垂れポトリと床に落ちた。それと共に中島の怒張を喰い絞める腸の動きも一層強く激しくなるのが分かった。

この少女の持つ素晴らしい能力に有頂天となり、中島は益々腰の動きを激しくした。

今は順子も幼い顔を快感に歪め、ハアハアと荒い息を吐き始めていた。

そして、中島を締め付ける腸の動きもより強く、よりリズムカルになっていった。

まともな性行も体験した事の無いはずの、この幼さの残る少女が、男の巨大な怒張を突き立てられ、肛門で性感を感じ取るなど信じられないことであった。

しかし、中島の激しい動きに煽られ、絶頂を迎えるのも間近のように見えた。

順子は中島の巨大な肉塊を腸内に咥えたまま、大きく仰け反ると、ウウッと食いしばるような小さな声を上げて、前門から激しく愛液を撒き散らし、そのまま力なく床にくずおれた。

その瞬間中島の物を強烈な圧力で噛み締めた。

中島はこれまで感じた事の無い程の強い快感に堪えられず、この貴族の少女の腸内に激しく放出した。

その激しい快感の余韻に中島は、しばし呆然と酔い痴れた。

順子は上半身を床に這いつくばらせたまま、ハアハアと苦しそうに息を吐いていたが、まだ中島の物を収めたままの排泄器官は、自分を絶頂に導いた物に事後の奉仕をするかのようにピクピクと柔らかくリズムカルに締めつけ続けていた。

その後技のような心地よい余韻に浸りながら、このような能力の後の穴を持った女は千人に一人か何千人に一人いるかいけないかでは無いかと感じていた。

そして、この高貴な家に生まれた小娘が、男を有頂天にさせる肛門を持つ何千人に一人かの特殊な能力を持っている女だと確証したのだった。

今改めて、野太い張り型を肛門に突き立て、隙間無く張り型を食い絞める、伸びきった肛門周りの筋肉を凝視しながら、丹念にその絶妙な内部をまさぐった。

まだ幼さの残る少女が、額や鼻の頭に汗を浮かべて、口を真一文字に結び腹筋を引き締め、か細い尻の筋肉を必死に駆使して、腸内に埋め込まれた異物を絡め取り、軟体動物のように柔らかく締め付け、外部に排出しようとしたり、また逆に内部に抽送しようとするかのような、感触を張り型を通して確認していた。

明るい朝の光に照らされて、自分の恥ずかしい二つの部分を男の目に間近に晒す恥じらいか、それとも秘部に突き立てた張り型が、幼い少女に性の快感を呼び覚ますのか、大腿から顔まで真っ赤に染めて、上気して熱を帯びた下半身からは、張り型により押し出された特有の臭いを帯びた腸内の空気と共に、熟した女の体液の臭いを立ち昇らせ、中島の鼻孔を刺激し、一層中島の獣欲を煽り立てるのであった。

その時、背後から何人もの人間が軍靴を踏みならして、部屋に入ってくる音が聞こえた。

振り返ると、8人の憲兵下士官が食堂の入口に整列し、敬礼していた。

「牛田軍曹以下、8名、敵国スパイの尋問の助勢に参りました！」

先頭に立って敬礼していた牛田軍曹が大きな声を上げた。

「何？ 助勢だとお・・・」

中島がギロツと目を剥いて立ち上がった。

助勢とは、ぬけぬけと言ったものだ！

なるほど、狂った上司の下には狂った部下が付くというものか・・・と、思いをめぐらしながら牛田達の方に近付いた。

大島と小島も女達を放り出して後に続いた。

上半身裸のまま、良く鍛えられた胸の筋肉を怒りのためかピクピクと痙攣させながら、憤怒を露わに自分たちに近付いて来る中島達を見て、牛田達は殴られると確信して、目を閉じて歯を固く喰い絞めた。

元より、ここに来て貴族の女達への虐待の仲間に加えて貰えるとの勝算が在った分けでは無い。

ただ上官だけが良い思いをしている現実には耐えられなかったのだ。

実は、一昨日の晩、中島中尉らが憲兵隊の隊舎から出奔した直後から、憲兵隊内は異常な緊張

状態に包まれた。

その緊張状態の原因が日本の敗戦にあると判ったのが、昨日の昼であった。

その後、憲兵隊内では、「死んで陛下にお詫びする」と、泣き叫び割腹しようとする者とか、「早く資料を燃やせ！」と、青くなっておろおろ走り回る者とか、「徹底抗戦！」と、ヒステリックな叫び声を上げる者とか、収拾の付かない混乱状態に陥った。

日頃上官風を吹かせて威張り散らしていた人々が、唯々周章狼狽する様を見て幻滅し、仲間と図ってここにやって来たのだった。

「命令！牛田軍曹以下8名に敵国スパイ尋問の助勢を命ずる！」

牛田軍曹の前に直立した中島が下命した。

最初は、怒りを感じた中島ではあったが、牛田達の傍に歩みながら、この申し出を面白いと感じるようになっていた。

この狂った若者達が、貴族の令室や令嬢をどのようにいたぶるのか、傍で見物するのも悪くない…… なにしろ二日間徹夜で責めていたので、丁度疲れも少し感じていた所だった。

この思いもよらぬ命令に、最初は驚いた様子を浮かべたが、直ぐに満面に喜色を浮かべて直立不動で敬礼しながら、牛田が応えた。

「復唱します！牛田以下8名は敵国スパイの尋問の助勢を行います！」

復唱を終えて、中島達が答礼を解くのを待ち構えたように、男達は歓声を上げて目当ての女達に武者ぶり付いて行った。

「こら！さっさと卵を産まんか！」

4人の若い憲兵が夫人を取り囲んで怒鳴り声を上げた。

食堂の壁際の花瓶が置いてあった小型の丸テーブルを中央に持ち出すと、花瓶の替わり夫人をその上に押し上げ、床に腰を下ろした男達はその周囲を取り囲み見上げながら、夫人をいたぶっていたのだった。「あんな大きな娘を二人も産んでいるんだ、卵の二つや三つ産めんはずが無いだろう！」

男達は面白半分に夫人の膣内にゆで卵を押し込んだのだった。

そして今度は夫人の努力によりそれを産み落とさせようとしているのだった。

小さなテーブルの上に押し上げられ、後ろ手に縛られたまま中腰の姿勢を取る夫人は危なっかしく体をよろめかせている。

テーブルの端からは、夫人の豊かな臀が男達の目の前に突き出し、その反対側では豊かな胸が男達の目を奪った。不安定なテーブルの上で少しでも安定を得ようと左右に開いた脚の間から、夫人が最も隠しておきたい秘部が露わに見えた。

濃密に繁茂していた飾り毛は、今朝中島により剃り上げられたばかりであり、成熟した割れ目が隠しようも無く野卑な男達の目に晒されていた。

その隣では、貴族の姉妹が男根を模した電極を秘所に突き立てられ、膣内に電流を注ぎ込まれていた。

憲兵が面白がりながらスイッチを押す度に、秘所内に電流が流れ込み、まるで膣壁を搔き回すような苦痛が姉妹を襲った。

そのかつて経験した事の無い耐え難い苦痛に、激しい悲鳴を上げ、油汗を流し、苦悶に顔を歪めた。

「まだたった20ボルトだぞ！何を大げさな声を出している、これからもっと電圧を上げるぞ。」

と、電気拷問器の電圧調節ノブに手を掛けた憲兵が薄ら笑いを浮かべながら、再びスイッチを押した。

更に電圧を上げた電撃を受けて、姉妹は同時に仰け反り、電極を装入された下腹をブルブル痙攣させた。

茂りの喪失した股間に、挿入された電極とそれを食い絞める膣孔がありありと見え、電流を注ぎ込まれる度にそれらが激しく収縮する姿が見えた。

長椅子に横になった中島達は、この憲兵下士官達の暴虐を面白そうに見物していた。

牛田軍曹に聞いたところ、中島達が憲兵隊を出奔して、この金田伯爵邸に向かったのは、かなり早い段階でばれていたようである。

そして、同じ様に嗜虐の喜びを知る牛田は、自分たちが伯爵邸に向かった理由を薄々感づいていたようだ。

腐っても鯛と云うが、短時間にここを探り当てるとは、流石に憲兵隊の捜査力は大したものだと感心した。

自分たちに追捕の手が伸びなかったのは、単に敗戦のドタバタ騒ぎでその余裕が無かっただけであり、自分たちは運が良かったと思った。

男達の好奇の視線に剥き出しの尻と隠しようの無い秘部を晒す夫人は、胎内に挿入された異物の圧迫感に額に汗を浮かべ、苦しげに眉を歪めていた。

そして下卑た男達の声が、今にも絶えてしまいそうになる朦朧として意識の中で、催眠術の暗示のように直接脳に響いていた。

男達の命ずるまま、膣壁に力を込め、腰をブルブルと揺らすと、剥き出しとなった夫人の割れ目が大きく膨らみ始め、鮭肉色した内部構造が見る見る開き始めた。

いよいよ夫人が卵を産み落とすと知った男達は、夫人の尻の下に集まり、決定的瞬間を見逃すまいと、目を見開いて、瞬きもせず下から見上げた。

大きく開いた会陰の中心の華洞が徐々にその口を開き、幾重に畳まれた濃いピンク色の襞の内部から茹で卵の白い表面が小さく見え始めた。

露出した白い球面は、周囲の柔らかい襞を掻き分け、見る見る大きくなり、やがてその球形の白い表面がはっきりと華洞から顔を出した。

夫人の豊かな体液により艶々と濡れ輝るその白い楕円形の球体に男達の血走った目が釘付けとなった。完全にその全体像を現した茹で卵はゆっくりと夫人の股間を離れて、男の持ち添える竹箆の中にぼとりと落下した。

真っ白い卵が、まるで臍の緒で繋がっているかのように、粘っこい透明の糸で夫人の肉洞と繋がりながら落下して行く様子が、まるでスローモーションのように男達の目に残像として残った。

貴族の貴婦人が憲兵の見守る前で産卵するという倒錯的な場面に、しばし男達は声も出なかった。

「こら！鶏なら鶏らしく啼きながら卵を産まんか！」

この沈黙を破るように一人が声を上げると、周囲の男達も「そうだ、そうだ、コケコッコーと啼きながら卵を産め！」と、はやし立てた。

男達に責め立てられ夫人は、さも恥ずかしそう最初コケコッコーと小さな声で呟いたが、男達から声が小さいと責め立てられ、捨て鉢となったように、涙を流しながら段々大きな声でコケコッコーと啼くようになった。

「そうだ、そうだコケコッコーと啼きながら卵を産むんだ！」、

「もっと腰を大きく振りながら鳴き声を上げながら産むんだ！」

口々に男達から囃し立てられ、目に一杯の涙を溜めて、男達の目前で豊満な双臀を扇情的に振りたて、コケコッコーと啼きながら股間に力を入れた。

男達に向けて高く尻を持ち上げたので、薑色の菊花や桃花の割れ目が男達に目に露わになっ

た。

淡い菊花の蕾がその皺をヒクヒクさせるのと同調して下方の柔らかく膨らんだ割れ目も再びその門を開き始めた。

その中心に在る女芯の濃いピンクの襞の奥から、再び白い塊が姿を現し始めた。

顔を真っ赤に染めて、コケコッコーと大きな声で啼き、下腹に力を込めると、飛び出すように二つ目の卵が産まれ出た。

大きな卵が通過した直後の産道は大きく開いたまま、その濃いピンク色した内部構造を露呈していた。

その華洞の内部からツツと愛液が流れ出し滴り落ちた。

「美味い！伯爵夫人の産んだ卵は美味いぞ！」

まだ夫人の体温が残り、愛液に塗れて艶々と輝る卵を取り上げて口に頬張った矢野伍長が歓声を上げた。

その声に、茹で卵は食べられるものであり、自分も伯爵夫人の宿した卵を食したいと思った男達が、最初に産んで箆の中に入ったままだった卵を取り合った。

幾人もの男達に揉まれ、ゆで卵は粉々になったが、それでも男達は浅ましく、その僅かな破片を口に頬張り会った。

その姿を見て、中島達も苦笑した。

「こら！貴様ら、何をやっておる！軍法会議に掛けられたいのか！」

突然背後で大きな怒声が響いた。

振り返ると、何時の間に其処に居たのか、憲兵大隊の大隊長が顔を真っ赤にして憤怒の表情で入口に仁王立ちしていた。

「日本は降伏し、軍隊は消滅するんだ！軍法会議も糞も在るか！」

中島が一声叫ぶと、制服のベルトのフォルスターから拳銃を取り出し、振り返りざまに引き金を引いた。

耳を劈くような銃声と共に、でっぷりと太った大隊長の大きな体が弾き跳ばされるように後ろに向かって倒れた。

床の上に仰向けに倒れたまま、真っ青な顔をしてこちらを見詰める大隊長の目には恐怖の光が宿っていた。

中島がゆっくり傍まで歩み寄り、床に倒れ伏す大隊長を一瞥した。

そして自らの戦果を確認するかのように、抵抗の意志を喪失した大隊長の軍服の上着のボタンを外して、上着の前をはだけ、自分の与えた負傷状況を確認した。

白いシャツが血に染まり、傷口からはドクドクと血が流れ出していた。

「上腹部盲管銃創か・・・血がどす黒い・・・肝臓に命中したな。」

至近距離から強力な軍用拳銃の直撃を受けたが、軍服の胸に付けた勲章と胸ポケットに入っていた、ぶ厚い手帳が銃弾の勢いを抑えたようで、貫通には至らなかった。

しかし、体内に入射した弾丸は肝臓を破壊し、門脈を断ち切ったようだった。

「持って30分、いや20分と云うところか・・・オイ！死にたくなければ傷口をしっかり押さえていろ！」

大隊長の手を掴むと傷口にあてがった。

大隊長も死の恐怖から、残った力を振り絞り、傷口を強く掌で押さえ血液の流出を防いだ。

「死ぬ前に、貴様に、観音菩薩を見せてやろう・・・」

蒼白な顔をした、大隊長を覗き込みながら中島が告げた。

「おい、大隊長殿をそこに運ぶのだ！」

牛田軍曹らを使い、瀕死の大隊長を運んだのは、応接セットのサイドテーブルの上であった。

そのテーブルは余りに小さく、大柄の大隊長の上半身を漸く載せることが出来るだけで、頭や、尻から先はテーブルから大きくはみ出していた。

治療のために運んだのだと思っていた下士官達が怪訝な表情を見せた。

キョトンとする下士官達を無視して、中島は後ろ手に縛られたままの伯爵夫人を連れて来て、サイドテーブルからはみ出した大隊長の顔を跨ぐように立たせた。

傷口を押さえ、青ざめた顔をして、苦悶の表情を浮かべていた大隊長であったが、突然目の前に全裸の伯爵夫人の剥き出しの性器が出現して、驚いた表情を浮かべた。

「どうだ？隠す物が何も無く、伯爵夫人の観世音菩薩様が丸見えだろう。ちょっと前までは立派なおケケが生えていたが、今は童女みたいにツルツルに剃り上げてやったからな・・・観音様を拝みながら死んで逝けるとは幸せだぞ・・・」

中島が面白そうに、大隊長に話しかけながら、夫人の腰を押して、大隊長の顔の真上に股間が来るように位置取りさせた。

次に緑子と順子を大隊長の足下に連れて来た。

そして、大隊長のズボンのベルトを緩めると、両手で傷口をしっかりと押さえているため抵抗出来ないのを良い事に、ズボンを脱がして、禪を剥ぎ取った。

サイドテーブルからはみ出した大隊長の下半身が剥き出しとなった。そして、剥き出しの両足を大きく左右に広げさせた。

恐怖と苦痛の為か、親指程の大きさとなり濃密な股間の毛の中に隠れる様に萎縮していた大隊長の男根を面白そうに二本の指先で摘み出すと、中島は緑子に咥えるように命じた。

緑子はおとなしく、その萎縮したモノに何度も舌先をはわせて優しく愛撫すると、意を決したように、強く吸い上げるように口に含み始めた。

そして順子にはテーブルの下に回って、大隊長の剥き出しにした肛門を舌を使って嘗めるように命じた。

前から男根を緑子の口技により責められ、下からは順子に尻穴を刺激され、大隊長の表情に変化が現れた。そして重傷の身にも関わらず、股間に変化が現れ始めた。

嗚呼！男と云う者は、死の直前に在っても男であり続けようとするのだろうか、不自由な体にも関わらず頭をもたげると、おずおずと舌を伸ばして、夫人の割れ目に舌をはわせ始めたのだった。

「こら！大隊長殿が嘗めやすいように、もっと腰を下げんか！」

中島が夫人の腰に手をまわすと、顔の間近までぐっと腰を下ろさせた。

中腰の姿勢となり、股を左右に割る形と成ったので、より一層秘部が開き、剥き出しの性器には容易に舌をはわせることが出来るようになった。

今や、大隊長はすっかり大きさを取り戻した怒張を強く吸い上げられ、裏門を刺激され、何かに憑かれたように夫人の性器を激しく嘗めまくっていた。

花園全体を舐め回した後、舌先でクリトリスを叩き、下に回って膣孔の周囲を嘗め、花芯に舌を差し入れその絶妙な伯爵夫人の内部構造を堪能始めた。

一方、幽鬼を思わせる死相を浮かべた蒼白の顔をした男に、膣孔を舌で愛撫され夫人は、嫌悪感と恐怖心で腰をブルブル震わせていた。

不意に大隊長がゴフォ、ゴフォと激しく咳込んだ。

その時、口内に逆流した血液が咳と共に噴き出し、大隊長が嘗めていた股間の透き通るような白い肌を赤く血に染めた。

自分の股間に飛び散った鮮血に恐怖したため、一瞬膣壁から緊張が失せた。

そして、胎内に最後まで残っていた卵がゆっくりと産道を滑り落ち始め、真っ赤な血の池と化していた大隊長の口内に真っ白い茹で卵を産み落とした。

そして、この卵が大隊長の気道を塞ぎ、大隊長の息の根を止める事になった。

大隊長はカッと目を見開いて、目の前の中島の言うところの観世音菩薩を見つめたまま体を激しく

痙攣させた。

その瞬間、この世の最後の精を激しく緑子の口内に放出した。

大量の精液を受け切れず、口外に溢れるのを見とがめた、若い憲兵が、「こら、折角大隊長殿から頂いた精ではないか！残さず飲み干せ！」と命じた。

度重なる拷問を受けて、精神が崩壊しつつあった緑子は憲兵に脅されるままに、大人しく口内に残った大隊長のこの世の名残の体液を飲み干すと、更に命じられるままに舌を伸ばして、大隊長の汗臭い股間に溢れた精液を清めさせられた。

ぐったりと弛緩した大隊長の肛門括約筋が緩み、順子の口内にボトボトと便塊を落下させた。

憲兵達は面白がって順子に便塊を飲み下すように命じた。

目を白黒させながら、嗚咽を堪えて順子は後から後から落下してくる便塊を飲み下した。

「観世音菩薩を眺めながら、貴族の子女に舌で湯灌して貰って、これで大隊長殿も迷わず成仏出来ることだろう・・・」と、片頬を卑猥に歪めながら中島が呟いた。

その後も狂った男達による、3人の貴婦人を生け贄とした、加虐の魔宴は何時果てるともなく続いていた・・・

「こら！卵はいくらでもあるんだ！もっと啼きながらどんどん産まんか！これに慣れたら、次はケツの穴で卵を産ませてやろうか・・・」

「貴様、随分柔らかい尻の穴をしているな！もう指が3本も入ったぞ！次は4本だ！」

「今100ボルトだ、どうだ、苦しいか？次は120ボルトに上げるぞ・・・」

昭和20年8月15日正午、天皇陛下による終戦を告げる玉音放送が静かに流れていた。

外では、敗戦を嘆き悲しむ人々のすすり泣きの声が何時までも甞していた。

そして、部屋の中では男達に責め苛まれる女達の悲痛の泣き声と喘ぎ声が何時までも甞していた。

終